

蘭学における発達の概念の導入について（3）

—— 内田正雄『和蘭學制』（1869・明治2年）まで ——

田 中 昌 人

On the Introduction of the Concept “Ontwikkeling” in Japan

—— In Dutch Learning from 1860 to 1870 ——

TANAKA Masato

江戸幕府の制約下にあったとはいえ、開国後1850年代後期に最盛期を迎えていたオランダ語の学習は、1860年代には転機に遭遇することになった。本稿ではこの時期の資料を取り上げる¹⁾。

当時、中国では、清が1857年の第二次阿片戦争後、イギリス、フランス、ロシアとの間で北京条約（1860）を結ばざるを得なくなっていた。このような情勢が契機となって江戸幕府は、1858・安政5年に、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとの間で修好通商条約と貿易章程を締結し、翌1859・安政6年には長崎に加えて神奈川、箱館を開港して前記5か国に自由貿易を許可した。さらに1860・万延元年には蕃書調所の充実を図ると共に、英、仏、独、露の諸外国語学科を置き、また外国新聞の翻訳にあたらせた。蕃書調所はこれ以後、1862・文久2年には洋書調所、1863・文久3年には開成所と改称されて、改組充実がはかられた。

その他、1860年代には幕府によって、新見正興を正使とする遣米使節（1860・万延元年）、竹内保徳を正使とする遣欧使節（1862・文久2年）、池田長発を正使とする遣仏使節（1863・文久3年）、小出秀実を正使とする遣露使節（1866・慶応2年）、徳川昭武を代表とする遣仏使節（1867・慶応3年）が派遣されている。又、派遣留学生も1862・文久2年の和蘭留学生を始めとして、幕府の方針を犯した場合も含めると、殆ど毎年のように欧米への留学生が派遣された。

一方で、幕府の方針を巡る国内の対立と安政不平等条約によって引き起こされた財政危機等の下で尊王攘夷運動が急進化するが、当時の国内外の情勢は近代化を不可欠としており、軍事、産業を中心とした技術者、医療、学術、文化諸領域の専門家を招く必要性は増大していた。長崎、横浜などの幕府諸機関に続き諸藩でも外国人が雇用され始め、1868・明治維新後の近代的諸制度の移入に伴って「お雇い外国人」が急増する時代を迎える。

かくて、江戸幕府機関においては、1860・万延元年を期して蘭学は洋学の一つとなり、1870・明治3年にはそれまで外交の公用語として用いられてきたオランダ語が廃止される等して、いわゆる蘭学の時代はその役割を一先ず終える事になる。しかし、この間に蘭学はこれ迄の蓄積の上に、他の洋学に先んじて学習の方法を変えることができた。即ち、従前の様に書物を中心に学ぶだけではなく、幕府による厳しい制約があり、又、極く一部の者に限られていたとはいえ、長崎に於ける幕府機関に雇入れたオランダ人専門家から、直接オランダ語による体系的な教育を受け

る事ができ始めた。

本稿では、転機に遭遇した1860年代の日本の蘭学で、ontwikkeling の概念がどのように導入されてきたのかを、1) 蘭語学、2) 蘭医学、3) その他の自然科学、産業技術、4) 社会科学、人文科学等の資料で調査した結果に基づく報告を行う。これ迄の調査によって、①この時期にontwikkeling などの語がオランダ人教師から蘭医学を直接体系的に学ぶ中でも導入されてきた事、②他の自然科学、産業技術の導入の面でも用いられてきた事、③更に社会科学、人文科学分野でも導入されてきた事、④それらの導入にあたっては、固定した訳語を対応させるだけではなく、全体としてみると、1850年代迄以上に各系の内外に於ける生成連関にふさわしい訳語が工夫されてきている事等が明らかとなってきた。本稿ではこれらの諸点の内、3) その他の自然科学、産業技術分野を除く、1), 2), 4) に就いて、原典に遡及した資料の紹介と検討を行う。3) を割愛したのは紙数の関係と、産業技術分野は1870年代になってからも河川工事等を中心にオランダからの技術の導入が進められた面があるので、別途取り上げる。尚、1860年代の英学などその他の洋学に於ける場合も別稿とした。

1. 蘭語学の場合

1860・万延元年に、蕃書調所に英、仏、独、露の諸外国語学科が置かれると、それらの入門書等の刊行が徐々に増えてきたが、いずれもまだ蘭語学の初期の様相を呈していた。一方、蘭語学習は、前稿でみたように、オランダで刊行された和蘭文典に基づく学習の方法が定着し、蕃書調所等でも、Maatschapij の『Grammatica』と『Syntaxis』が引き続き用いられた²⁾。それらの事もあって、前稿で取り上げた1850年代後半の期間程、多くの新しい蘭語学習書等の刊行はみられなかった¹⁾⁻²⁾。僅かに伊東朴斎訳『洋学須知』(1866・慶応2年)をみる位である³⁾。しかも本書は古田東朔によると公莊徳郷・窪田耕夫同輯『洋学須知』(1859・安政6年)の版木を用いて改訂を加えたものとされている^{4), 5)}。伊東朴斎についても未詳である。序文が当時開成所教授であった柳河春三に変わっており、柳河春三は前後して『洋学便覧』(1866・慶応2年)、『洋学指針英学部』(1867・慶応3年)を刊行しているので、開成所等に於ける学習の必要に応えたものであろう。出版状況は蘭学から英学等への移行が進んでいることを反映している。但し、注目されるのは、本書の「附録 熟語箋」には公莊徳郷・窪田耕夫のものにはみられなかったontwikkelen の語が追加収録されている事である。

ここでいう「熟語」の定義は明確でなく和蘭文典や字書にない新しい用法を取り上げて編集しようとしたものとみられる。多義に亘る「前詞」と「接続詞」を集め、或いは「實名詞形容詞ニ転用シ或ハ副詞間投詞に転用スル者アリ是亦弁別セザレバ混現ヲ免レズ」として訳解に誤りがないことを期して編集されたものである。この中には「ver, be 等ノ如キハ他詞ニ加フル前詞ニシテ独立ノ用ナシ故ニ録セズ」とされているものもあるが、「附録」の“O”の3ページ目には次の語が収録されている³⁾。

「ontwikkelen 卅々々」(29)

刊本の蘭和辞書にontwikkelen と動詞形で収録、和訳されたのはこれが最初である。しかも、これ迄のMaatschapij『Grammatica』の文典訳で用いられていた「解」を基本とする和訳ではない^{1)-①)}。解くことによって内から生じてくる事や生じてくる物の意味を把えて訳解をする事がで

きるようにとの配慮が込められた訳語として「生ズル」が与えられている。ここには前稿迄に述べた蘭医学等に於いて新形成物が「生ズル」場合に「発生スル」との訳解がなされてきた蓄積が受け留められているとみられる^{11)・②}。この訳を基本として、この語が使用される個々の場合に応じて、語としての共通性を一層深く本質的な所で扱えた適切な訳解が諸領域で行われ易くなった事と思われる。

時期は未詳であるが、この頃から次に紹介するように、これ以前の時期には見られなかった「熟語」と銘打った写本が登場し、そこに *ontwikkelen* が収録され、「解ク」ではなく、「生ス」を含むさまざまな訳が与えられるようになってきた。この語の訳解に対する工夫の必要性が高まってきた事の反映でもあろう。

① 著者未詳『熟語集』（時期未詳）^{6)・①}

東京外国語大学洋学文庫所蔵の資料で、「佐澤氏記」の印があり、次の訳がある。

「*ontwikkelen* 生ズル 生スル 生ズル
生スル 生ズル」(37)

② 著者未詳『熟語叢』（時期未詳）^{6)・②}

雄松堂マイクロフィルム R20 に収録されている資料で、上山藩奥山又三郎蔵となっており、次の訳がのこされている。

「*ontwikkelen* 生ズル 生スル 生ズル
生スル 生ズル」

両者は基本的に同じ系統の写本である。幾つもの用例に対応した訳が考えられている点が従前の和訳とは異なる。本稿で取り上げる柳河春三や神田孝平の翻訳領域で用いられた訳語に近い所から、開成所あるいは医学所の系統で作成されたものではなからうか⁷⁾。

2 蘭医学の場合

1) Pompe van Meerdervoort, J. L. C. による医学教育において

蘭学の中でも蘭医学の新たな導入は、1840年代半ばから10年余りの間、幕府によって改めて抑圧、限定され、例えば内科関係の施術と書籍出版の許可は得られなかった^{11)・①, ②}。しかし、外科、眼科、牛痘接種等の領域での顕著な貢献は認めざるをえず、一方、漢方の元締めである多紀元堅と多紀安良が相次いで亡くなると、1858・安政5年には江戸に種痘館が設けられ、第13代將軍家定の病の治療にあたる待医として桂川甫周などの蘭方医が登用されるようになった⁸⁾。前稿で述べた Hufeland, C. W. 『*Enchiridion Medicum*』（1836）の中で、最も内科的であり治療手法を取り上げていた緒方洪庵重訊『扶氏経験遺訓』（1858・安政5年～1861・文久元年）の刊行が10年以上も許可されることなく放置された上で、ようやく刊行ができたのもこの時期になってからである^{11)・②}。以後、幕命を用いる事によってではあるが、西洋医学への門戸は徐々に広げられていった。

それらの中で画期的とみられる事は、長崎海軍伝習所で1857・安政4年11月12日以降、Pompe van Meerdervoort, J. L. C. (1829～1908) による総合的な西洋医学教育が開始された事である^{9), 10), 11)}。彼は幕府の要請で、1855・安政2年に開設された長崎海軍伝習所第2回派遣団(1857～1859) 教官の一員として来日した。海軍伝習において博物学と医学の担当に備え入れら

れたオランダ海軍の軍医であった。オランダ人が日本人に医学教育を行う事は許されていなかったが、海軍伝習生の名目で幕命を受けた松本良順が実質的な西欧医学教育を受け、各藩から来た陪臣や町医は松本良順の聴講に陪席するという建前を採る事によって講義に出席し、実質的な教育を受ける事ができた。Pompe van Meerdervoort, J. L. C. もオランダ本国で十分な準備をした上で臨めたのではなく、日本側でも受け入れ条件を整えてのことではなかったが、来日した1857・安政4年11月12日から1862・文久2年11月1日に帰国する迄の、最初の3年間には主として大村町医学伝習所で日本最初の総合的な西洋医学教育が行われた。1861・文久元年9月21日に欧米式の病院である小島養成所並医学所が完成してからは、翌年8月迄、念願の実地指導も行われる事になった。

彼以前の蘭医学の学習は、入手できた書物を中心にしたもので、蘭方医の模索に頼らざるを得なかったが、彼は系統性をもった総合的な西洋医学教育を実施しようとした。それは、緒方洪庵をして「是こそ我が蘭学一変の時節到来して千載の一時とも謂ふべき機会なれ」といわしめる程のものであった¹⁰⁾⁻¹¹⁾。その事は丁度、前稿でも述べたように、蘭語学が試行錯誤の段階から和蘭文典を基に体系的に学ばれ始めた事によって、多くの学習者を高い水準にまで到達させ得た事に続く、蘭医学分野における更に画期的な出来事になったといえよう。藤井尚久もこの時期からドイツ医学の移植の始まる1870年迄を「西洋医学の輸入の第3期」としている¹²⁾。

Pompe van Meerdervoort, J. L. C. の記録によると、講義では、物理学、化学、包帯学、人体解剖学、組織学、生理学、病理学、内科学、調剤学、外科学、手術学、眼科学、法医学、医事政策等が取り上げられた。最初は午前、午後各2時間、メモを読んで板書等をしたものを通詞が和訳し、生徒が筆記するという手順がとられたと記されている⁹⁾⁻¹⁾。他に、彼持参の蘭医書を筆写した資料もみられる。更に、関係者の尽力で解剖実習と病院の新築が実現し、鉦山開発の課外講義や写真術の個人指導も行われた^{10), 11)}。今日保存されている蘭文筆記ノートは少ないが、和訳講義録は、人身窮理学、原病総論、原病各論、外科論、解剖学、眼科、薬性論、機(吉)里仁機、内外経験良方、養生館方叢、牛痘論、その他があり、写本が行われている¹⁸⁾。彼自身が用いたテキストは、彼が軍医学校時代に学んだものを基に船載書を参考にしたとみられるが、今後の検討が待たれる¹¹⁾。帰国前の1862・文久2年10月15日に、彼は業を終えた学生61名に卒業証書を渡した。よく学び実地にあたって十分といえる者22名には第1級の証書が、努力し、よく働いた者16名には第2級の証書が、授業は受けたが成績は芳くなく独力で病人を扱うのには不十分な者23名には第3級の証書が、それぞれ手渡されたと記されている⁹⁾。

幸い、1859・安政6年1月10日から行われた原病(病理学)総論の佐藤尚中による蘭文筆記『(朋氏病理論) - Algemeene Ziektekunde』の一部等が最近、佐藤道夫家から国立歴史民俗博物館に寄託された^{13), 14), 15)}。これらの資料は、松本良順によって和訳され、『甫謨百先生原病学』等として筆写普及されたものの原本にあたる¹⁸⁾。

松本良順(1832~1907)は、順天堂の創始者佐藤泰然の二男で佐倉藩医松本良甫の養子となり、幕命によって伝習を受ける事になった経緯が明らかにされている^{10), 11), 19)}。

佐藤尚中(1827~1882)は、佐藤泰然の門下で蘭医学を修め、養子となって佐倉藩に出仕、藩命によって学ぶ事となったものである^{10), 11), 20), 30)}。

この時のPompe van Meerdervoort, J. L. C. の病理学の基本特徴は緒方富雄によって明らかにさ

れている²¹⁾。即ち、1855年の発見を基に、1858年に Virchow, R. L. K. によって提唱された細胞病理学は、その後の病理学に革命をもたらす事になった²²⁾。しかし、Pompe van Meerdervoort, J. L. C. がオランダを出発したのは1858年であり、彼が1859・安政6年1月10日から講義を始めた病理学総論等は細胞病理学のそれではなく、それ以前の液体病理学によるものであった²¹⁾。彼は前稿で取り上げた Hufeland, C. W. や Richerand, A. B. B. の生氣論的立場の生理学や病理学よりは新しい細胞説の立場に立っている。しかし、緒方富雄によると、その細胞説は「細胞は細胞から」生ずるとする立場はまだ取り入れられておらず、「細胞は体液から」生じ、そこに変調が生じて細胞組織が病むとの立場に立っていたと指摘されている²¹⁾。これは、松本良順訳『甫謨百先生原病学』巻之一で「セル」ヲ生スル原ハ則血ナリ故ニ血ヲ以テ「セル」ノ営為ヲ豫定ス」と述べられている事^{18)-①}、蘭文筆記『(朋氏内科書)』の和訳『原病各論』巻之一は「Bloedzenúw Ziekten (血液神経諸病)」から始まっており、巻之九は「悪液病体中ニ在テ有害ノ品血中ニ生ス」場合が述べられて、その「五」にある「癌」は「悪液病 カヘーキシャ カンチルサー・アキリシャ」とされている事等からも納得される指摘である^{18)-②, 191-5)}。

緒方富雄は、液体病理学の特徴は、この「腫瘍」の章を検討すると明らかになると指摘して、佐藤尚中の蘭文筆記『(朋氏病理論) - Algemeene Ziektekunde』の「腫瘍」の部分を紹介、大意訳を行っている²¹⁾。ここで紹介されている蘭文の7個所に ontwikkeling などが用いられているので、国立歴史民俗博物館に寄託されている佐藤道夫家資料で確認し、さらにこれを1860年当時の松本良順がどのように和訳していたのかをみるために、全文訳が保存されている長崎大学所蔵の『甫謨百先生原病学』（総論）で検討する^{18)-①}。

国立歴史民俗博物館に寄託されている『(朋氏病理論) - Algemeene Ziektekunde』は第2分冊目と第3分冊目の2冊である¹³⁾。「磐水引日本紙ニ鷲ペンヲ以テ書キタルモノ」とされたB5版和綴製本である。この第3分冊目の21枚目から第5章「Gezwellen (Tumores)」が始まっている。松本良順は『甫謨百先生原病学』（総論）の該当個所でこれを「腫瘍ヲ論ス」と訳している。以下、該当個所の検討にあたっては、佐藤尚中の蘭文筆記については Pompe van Meerdervoort, J. L. C. がどの書を原典として用いたか等が未詳なので佐藤尚中による蘭文を（「Pompe van Meerdervoort, J. L. C.」）として先ず記し、次に松本良順の和訳を記した。尚、蘭文の後の括弧内には第3分冊目のノートの何枚目であるかを記し、更に緒方富雄論文に引用されている『明治前日本医学史 第2巻』（1955）の蘭文収録ページを＝で加記した²¹⁾。佐藤道夫家資料と少し異なるところは、引用蘭文中、括弧内に緒方富雄による綴字その他の説明を付した。尚、佐藤尚中も宇田川玄真等と同様、ontwikkeling のkkをlkと筆記しているがここではkkとした。以下の論述の際の医学用語は緒方富雄の大意記に従った。

① ontwikkeling は、先ず、腫瘍の成り立ちを述べた所で用いられている。腫瘍は先天的である場合や後天的である場合があるが、いずれにせよ臓器の病的な形成力 (ziekelijke vormdrigt) が最大になった所で正常の血液成分の分解が引き起されて形成されるとの見解が示されている。

(Pompe van Meerdervoort, J. L. C.) 「Deze ziekte : vormdrift bewerkt al zoo (al zoo) in de daartoe voorbeschikte orgaan de ontbinding van gezondbloed en hieruit vormen zich nú (nu) de gezwellen op het punt waar deze vormdrift het grootste is ontstaat het middelpú (u) nt des gezwellen en komt nú (nu) verder tot ontwikkeling. (Ⅲ-22=438)

(松本良順)「〔第一〕尋常血液性分ヨリ器械ノ成形力失常ニ因テ腫瘍ヲ成ス是遺病或中年ニ在リ」

松本良順は当時、orgaanを器械と訳している。ここでは腫瘍の中心が現れると、次第に成長していく事が要約されている。

②, ③ 臓器の活動が増加した時に腫瘍の芽を取り込む傾向が強くなると述べた所で2箇所、次のように用いられている。

(「Pompe van Meerdervoort, J. L. C.」)「Daarom zien wij na hevige inspanning, na voleindigde ontwikkeling der orgaanen, en na ziekelijke prikkeling den aanlig tot gezwollen toenemen. Longtuberker (1) ontstaan het meest na dat de ontwik :」(Ⅲ-23=459)

(松本良順)「劇シク其部ヲ勞スルノ後或ハ器械ノ育生成就スルニ由リ或ハ非常刺激ニ由テ終ニ腫瘍ノ因ヲナス肺結節腫ハ多ク生育成就スルノ後ニ発シ」

激しい活動、臓器の育生成熟、病的刺激などの後に腫瘍になるとみられている。例えば肺結核は肺の成熟が極限に達した後に発生するとし、引用箇所の後では「子宮癌ハ月経絶止ノ後発スル事多シ」と記されている。

④ 悪性腫瘍は増殖力が強く組織外へ増殖し、又、常に再発するが、良性腫瘍は周囲の組織を破壊せずに成長しても害を及ぼさない、と述べた所で用いられている。

(「Pompe van Meerdervoort, J. L. C.」)「Goedaardige gezwollen, (なし) (ver) krijgen (in iets—鉛筆書き) de bovenhand in de weefsels waarin zij zich ontwikkelen.」(Ⅲ-23=459)

(松本良順)「良性腫ハ其発スル近傍ヲ荒蕪セス而シテ全身ニ弥漫セス」

⑤ 次は、Virchow, R. L. K. が否定した細胞芽説が説かれている所である。腫瘍はその芽質乃至種子から成るとみられる事が次のように述べられている。

「Ook deze gezwollen hebben de cel tot grondvorm. Doch men kan geene standvastig verschil voor dezelve vinden, specifieke cellen bestaan niet, oude cellen zijn dikwijls moeilijk te herkennen, zij zijn meest in een (hoopje—鉛筆書き) korreltjes overgaan. Deze korrels zijn het waarschijnlijk die een voortplantingsvermogen hebben; men wil ze beschauwen als de kiemstoffen of zallen dezer gezwollen.」(Ⅲ-24=460~461)

これを松本良順訳は次のように訳した。

「○此諸腫瘍皆胞ヨリ成ルト虫トモ各異種ノ胞ヲ有セサル故ニ判然タル区別ヲナス事克ハス既ニ至久スル胞ハ形変シテ之ヲ知ル事克ハサルアリ而シテ是多クハ細粒状ヲ積推ヲナス其細粒恐クハ蕃滋ノ製ヲ有スルナラン」

液体病理学の細胞芽説で癌を説明しようとしているが、これ以上は説明できない。その後でontwikkelenが次のように用いられている。

(「Pompe van Meerdervoort, J. L. C.」)「De karreltje kennen in het bloed worden opgenomen, van moeder op kind overgaan en op eene zoodanige wijze op eene daartoe geschikte plaats en ten gelegene tijd zich beginnen te ontwikkelen.」(Ⅲ-24=461)

(松本良順)「余謂ラク是此腫瘍, 種苗ニシテ血中ニ吸収セラレ遺傳病ノ原トナル」

この芽質 (kiemstoff) が血液中に取り込まれて、母から子へ移っていき、適した所で、適した時に腫瘍に迄発育するとみられている。これが当時の液体病理学の見解であった。

⑥ 癌種と脂肪や繊維との関係を述べた後で、次のような説明が行われている。

〔Pompe van Meerdervoort, J. L. C.〕「De kanker cel tracht zich in het weefsel uit te be-reiden en zoekt nieuwe plaatsen op om zich to vestigen; mergspons en tuberker (l) dringen op de plaats zelve in de weefsels en zich meer op de plaats van ontwikkeling.」(Ⅲ-24=461)

〔松本良順〕「癌ノ胞ハ周囲ノ組織中ニ过大シテ更ニ康健ノ部ニ及ホス乳様海綿腫及結節腫ハ此発スル処ノ部分ニ画域ヲナス」

癌細胞は周囲の組織へ拡がり、自らを固定する新しい場を求めていく。それが発育する場所へは海綿腫や結核が集まって癌腫にいろいろな形を与えていく、との見解である。

⑦ 良性腫瘍に関して7項目のまとめがなされているが、その4項目めで軟骨腫の説明が行われて、そこでも用いられている。

〔Pompe van Meerdervoort, J. L. C.〕「4° Kraakbeengezwel (enchondroma), het (zelve 一鉛筆書き) de grondvormen van het kraakbeen bevat. Zij komen het meest in de (n) nabijheid der beenderen voor, ook in de mamklier voor (ver を鉛筆で voor に訂正) speak, (, なし) selklier; men heeft soms opend: kraakbeenderen zich zien ontwikkelen in gewrichten, slijmbeursen, (, なし) en weivlieszakken.」(Ⅲ-26~27=464)

〔松本良順〕「〔其四〕軟骨腫 是軟骨ノ胞ヲ含ムモノニシテ多クハ骨ノ近旁ニ発ス又乳様耳後腺ニ発スル又関節粘液膜及沓乙膜中ニ一種ノ軟骨ヲ造成スル事アリ」

良性の腫瘍の内、軟骨腫は軟骨の基本形を示すもので骨の近くに生ずる事が最も多いが、乳腺や耳下腺にも生ずる。場合によっては遊離した軟骨が粘液囊や漿液囊の中に発育する事がある、と述べられている。

前二稿では、Hufeland, C. W. や Richerand, A. B. B. などの生氣論的立場の医学で内的必然性に基づいて生命的なるものが発生してくることを現わす際に、ontwikkeling が用いられている事を指摘した^{1)-①, ②}。続く、細胞説の登場後、Pompe van Meerdervoort, J. L. C. の場合は液体病理学の立場からのものではあるが、通常ならざる悪性、良性の新形成物が内的必然性に基づいて発生してくる事に対しても ontwikkeling が用いられている事が明らかとなった。内臓組織が成熟を遂げたり、機能を停止する事によって、体液の働きにより茅質が現れてくるとの見解に基づいて用いられている。

今一つ、Pompe van Meerdervoort, J. L. C. は、「腫瘍」の後、第3冊目の27枚目から始まる第四套の所で見出しに、「Ziekelijke ontwikkeling en afwijkingen in bouw en omvang」と ontwikkeling の語を用いて、その「Misvormingen」の本文中では6個所に亘って ontwikkeling などの語が用いられている。この第四套の見出しは松本良順によって、「身体及其諸器械ノ異形ヲ論ス」と訳され、その第一篇は「^{ヘドラクテ}畸形」と訳されている。佐藤尚中の蘭文には「ヘドラクテ」はないので、誰かがラテン語を加えたものであろう。そこでの内容は、「先天ヨリ造形ト速フモノ」と「発育ノ全カラサルニ由テ生スルノ畸形」の二つに分けて述べられている。前者には、ontwik と ontwikkeling が各1個所あり、大意訳されている。「稀ニ有ルモノニシテ発育ノ機又迅速」な場面が脳水腫の中にあるとして紹介されている所で、ontwikkeling に「発育」の訳が与えられている。後者には4つの場合があげられており、その第一に「Den bestaan misvormingen waarin de ontwik:」(Ⅲ-30)とある。これは「諸部ノ発明十分ナラサル者或ハ缺損スル者」と訳されてい

る。発育前の問題と見られるので注意して「発明」と訳したのであろう。この訳は、本稿1で紹介した『熟語集』にも収められていた^{61)-63, 2)}。他の3箇所は *ontwikkeling* で、後者の小見出しの「発育ノ全カラサルニ由テ生スルノ畸形」以外は、「胸及肢内ノ諸器其常位ヲ失スル者は是恐クハ発育ノ比其位置ヲ失スルニ由ルモノカ未タ詳カナラス」、「余ヲモヘラク其遺傳スルヤ只男子精液ノ失常シテ発育ノ機十分ナラサルニ由テ其子異形ヲ為ス事アリ」と訳されていることで明らかのように「発育」があげられている。

先の「腫瘍」の章では「発ス」と訳される場合が多かったが、この「畸形」の章では「発育」と訳される場合が多くなっている。松本良順訳には他に『外科学説』の「外科通誌」の第一で、「人身諸器発育ノ機発動スレハ必ス康健上ニ於テ血液ノ灌溉ヲ発ス」の訳がみられる。又、松本良順訳には『朋氏解剖説』巻之三の最後で「淋発管ノ発成」をのべ、その初期の段階では「此管ヲ児母胎ニアルノ間己ニ発生スル所ナリ」と訳し分けをしているとみられるところがあるが、この場合の蘭文は未詳である。

以上の事等からして当時伝えられた Pompe van Meerdervoort, J. L. C. のもたらした蘭医学では通常的人身諸器の発生の場合のみならず悪性、良性の通常ならざるものの新形成物の発生や、通常発生組織の発育過程にみられる障害が現れてくる場合のいずれにも *ontwikkeling* が用いられてきていた事と松本良順によってそれが訳し分けられてきている事が明らかとなった。

今一つ注目される事として Pompe van Meerdervoort, J. L. C. は『(内科書)』の最後、松本良順訳『原病各論』によると「第三套 精神病」の第6章で「知識減衰無才識 フルミンテルデ ベウエーヒンフスライチンフ」を取り上げている^{149), 189)-2)}。これは「精神発育不全」とは区別されるとして、病度を四度に分けて把え、原因や経過、治法を述べている。この間、蘭文では諸機能の発育にあたる所を中心に8箇所に亘って *ontwikkeling* を用いた説明が行われている。その結論部分の訳では、この場合の攝生として、「学則ノ如ク順正ニ精神体格ヲ発育セシム其ノ法大ニ偉効ナル良法トナスヘシ」として、このような場合でも *ontwikkeling* を「発育」と訳し、それへの援助を重視する見解が導入されている。これは、Pompe van Meerdervoort, J. L. C. が当時の日本に於いて、身分・貧富に拘らず治療する事を重視して無料の治療を行ったり、売春を禁止するように述べている事と共に注目される。その導入は未だ原初的であり、実際はそれとはかけ離れた実態が続いたとはいえ、今日でいう人権や人間の尊厳を「発育」という観点から守ろうとする立場に連るものとして、もっと歴史的に吟味され、評価されて良い内容をもっていると思われる。

1862年に彼が乗った帰国船には、幕府から派遣された最初の和蘭留学生として、本稿で取り上げる内田正雄や、別稿で取り上げる予定の西周、津田真道等が乗船していた。彼はオランダへ帰国後も日本からの留学生の相談に応える等の協力をしている。一方、彼のオランダへの帰国と共に松本良順は江戸へ、佐藤尚中は佐倉へ帰り、それぞれの立場、場所で、医療と医制改革にあたった。その業績は別途研究される必要がある^{191), 20)}。

ところで Pompe van Meerdervoort, J. L. C. は帰国後、『Vijf jaren in Japan (1857~1863)』(1867~1868)を刊行している⁹⁾。同時期の日本に滞在して先んじて刊行された Alcock, R. 『The Capital of the Tycoon』(1863)を念頭に置いて自らの見解を述べたものである。Alcock, R. は遭遇した事態の文明史的考察を行って *development* などを用いていた²³⁾。Pompe van Meerdervoort, J. L. C. の場合は、*ontwikkeling* などを次のように用いている。即ち、「*ontwikkeling van land en*

volk」(I-5), 「ontwikkeling der volkeren」(I-5), 「ontwikkeling van staat en volk」(II-11), 「intellectueele en materiëele ontwikkeling」(II-45), 「door ontwikkeling alleen kan Japan onafhankelijk blijven.」(II-45), 「ontwikkeling dezer streken」(II-47), 「industriëele ontwikkeling」(II-125), 「die met krachtigen arm de bestaande verwarring opruime, en dan zal de ontwikkeling met reuzenschreden voortgaan.」(II-126), 「Men zorge voorts voor wetenschappelijke ontwikkeling.」(II-127), 「Maar vooral raad ik aan, dat men de handen ineen sla, om het volk te ontwikkelen.」(II-133), 「dan beschaving, ontwikkeling en wederzijdsch belang.」(II-134), 「ontwikkeling van den handel」(II-152), 「en het rijk door onderwijs en ontwikkeling.」(II-161), 「ontwikkeling van het Japansche rijk.」(II-172), 「het landschap Satsuma zijne ontwikkeling in de latere jaren.」(II-196), 「industriëele ontwikkeling van het Rijk.」(II-243~244) といった具合に用いられている。それは藩や国家、国民といった単位で扱えられ、貿易や産業といった営みが行われる事に対して、又、それが知的、物質的な成果をもたらす事によって、開発や進歩発展として進められ、啓蒙や、相互利益と同じ価値をもったものとして、従ってそれらは教育に待つところが大きいものとして、— 用いられている。

その他に、「wiens verstand zeer weinig ontwikkeld was.」(II-25), 「het volk is moedig en ondernemend, naar de omstandigheden waarin het zoolang verkeerde zeer ontwikkeld.」(II-125), 「Wij moeten hier nu nog nagaan hoedanig zich de handel bereids had ontwikkeld.」(II-150) といった用いられ方もある。この3箇所の内、最初のもは、将軍家定の知能の発育が遅れている事に対して用いられ、次は、国民は勇気があり、進取の気性に富み、環境に応じて発達していく事に対して用いられており、第三の場合は、幕府の役人が妨害している中での貿易の発展ぶりに対して用いられている。彼の用法は、Alcock, R. の様な文明史的考察の側面を持ちつつ、Parkes, H.-Dickins, F. V. による類型的用法に近い特徴も有しているといえよう²³⁾。

2) Bauduin, A. F. と Mansvelt, C. G. van

① Bauduin, A. F.

Bauduin, A. F. (1820~1885) は、Utrecht 陸軍軍医学校の生理学の教官であり、生理学と眼科にも精通していたとされる。Pompe van Meerdervoort, J. L. C. の後任として、1862・文久2年の秋から1866・慶応2年の暮まで小島養生所並医学所の教官を務めた²⁴⁾。その間に、数学、物理学、化学等を医学教育とは区別して、別の専門の教育者によって実験をもとにした教育を行うべき事を幕府に建言している。その結果、1865・慶応元年には長崎に分析窮理所が創けられ、オランダ人化学者で陸軍軍医の Gratama, K. W. が招かれる事になった。養成所は、その時精得館と改称されている。Bauduin, A. F. は1866・慶応2年に任を終えて帰国した際、松本良順の長男松本銈太郎とポンペに続いて教育を受けた緒方洪庵の二男緒方惟準を、医学を修めるための和蘭留学生として、オランダに受入れる為の手続きをしている。翌1867・慶応3年には再び来日し、幕府が江戸に病院と医学校を建設するのに協力する為に和蘭留学生と再び帰国したが、次に三度目の来日をした折には幕府は崩壊していた。そのために一時、上海に移っていたが、1869・明治2年に大阪に病院と医学校ができ、緒方惟準が責任者となってからは、そこの教官として着任、講義等を行っている^{24)-④)}。1870・明治3年には、明治政府によって、大学東校での医学はドイツ医

学を採ることが決まった事もあり、同年帰国の途に就いたが、普仏戦争によってドイツからの医学者の日本到着が遅れたので、困った明治政府は Bauduin, A. F. に講義を依頼した。彼は一度は断ったが、2か月間だけ大学東校での講義を引き受けている^{24)⑤}。

Bauduin, A. F. の長崎での教育は朝8時から10時まで講義、12時までが入院患者の廻診、午後1時から外来患者の診察であったとされる。1870年末に帰国するまでに多くの学生の教育と患者の治療に当り、眼科治療をはじめ多くの治療手技を伝えると共に、大学東校を上野に建てる計画に反対し、これを公園として残す上でも貢献した。このように明治維新後も弟子への協力を惜しまず、医療の近代化を進める事に貢献したが、これ迄の調査では保存されている蘭文筆記ノートは少なく和訳資料が基本である^{25)、26)}。原典探索は今後の課題となる。

初期のものとみられる研医会図書館所蔵の『抱氏人身窮理書』は生理学書であるが「血液」から始まっている^{26)①}。「血液ハ諸物ノ新陳代謝スル中点ナルヲ以テ首章ニ於テ是ヲ論ス元來諸物ハ直ニ変化シテ諸械機ニ転ス事能ハス必ス諸液ニ化シテ而后ニ始テ転化スル事ヲ得ルナリ」と記されている。「吸収機」即ち胃腸の所では、諸液より胞子を生じ、それが諸器を構成すると述べているが、そこではそのようになることの説明に「生育ト云フノ外ナシ」としている。当時は液体から細胞が、更に器官ができることは説明できず、こう述べるしかなかったのであろう。病理学のものとしては抱桃英口述筆記『崎山病院抱氏口授 内科各論—原病各論—』がある^{26)⑤}。

「呼吸器ト血液循環器ノ諸患ヲ論ス」から始まり、「喉頭腫瘍ハ血液ニ関スル病」などと述べ、「腫瘍」の個所では「膿ヲ滲出シ深ク内部ニ侵蝕ス而シテ癌毒ヲ血中ニ吸収全身癌毒質トナリ」として、「癌腫悪液質」では「癌腫ヨリシテ全身ノ血液不良トナルナリ」と、彼も明らかに液体病理学の立場に立っている。

東洋文庫所蔵藤井文庫本の蘭抱導英口授『人身窮理—抱氏人身生理学—』では、卷之一「総括」の所で、動物や植物が種子から発することを述べた個所が何箇所もあり、和訳者による次のような訳出語の変化を経て「発育」が登場している^{26)②}。

「○活物則チ動植二物共ニ母体種子ヨリ造育ス然レトモ其創成ノ種子ハ何等ニ由テ生スルヤ知ルヘカラス—(中略)—賤微ノ動植二物モ大氣地態宜シキヲ得レハ造育宜キヲ得テ具有スヘシ」(2~3)

「○動植二体共ニ種子ナクシテ発育スル者ニ非ス其種子ハ〔セル〕ヨリ成ル生機ヲ含蓄シ以テ造化発育スル者之然レトモ創成ノ種子及ヒ生機ノ原由ハ知ルヘカラス」(4)

「動物ニ至テハ陰陽ノ別アリ相合シテ発育ノ原トナル種子ハ〔セル〕ニシテ胞ヨリ成ル此〔セル〕生機ヲ得テ周囲増大スヘシ」(5)

「動植二物共ニ十全ニ發生スレハ生機モ十全スヘシ然レトモ大成スレハ復其妨碍ヲ生スルコトアルヘシ発育スルニ至テハ貴賤ノ別ナク造化スヘシ〔ポレーブ〕ノ如キハ切断スレハ再ヒ成育ス動物ノ如キハ否ラス貴賤共ニ生長スルノ趣キ同一ニテ」(6)

ここでは内的なるもの—種子は、外的なるもの—大氣地態を得て「造育」とみられている。「造育」から「発育」へ、「造化発育」を媒介にして訳が移行している。かかる「造育」を内包した概念として「発育」が用いられている。種子のセルが生機を含蓄する事によって「造化発育」とみた上で、「発育」と「造化」は連関しており、その全体を含んで「発生」を把えているといえよう。それは「大成」とは区別される。更に生理組織には「成育」、諸器官や諸機能

を含む機生体には「生長」をあてている。ここでは、使用されているオランダ語の区別と訳者が未詳であるが、当時の制約された知見に立つとはいえ、ontwikkelingの関連現象が分析・総合され、初期的ではあっても、生成連関に於いて訳語に工夫がされている事が注目される。

抱桃英講読『外科通論』（時期未詳）と戸塚法眼が再訂をしている幕洞院口授筆記『外科各論』（1866・慶応2年）の「腫瘍」の所では、「発ス」と「生ス」が使い分けられている個所があり、また「新形成物」の訳語もみられる^{26) - 27)}。いずれも蘭文が不明であるが、Pompe van Meerdervoort J. L. C. でみられた様に、通常の場合と、通常ならざる悪性・良性の新形成物や通常組織の発生障害の発生に対しても ontwikkeling などが用いられたであろう事が推測される。

長崎での任務を終えて帰国後も、Bauduin, A. F. は、幕府との協議を履行する為に三度目の来日を行って遭遇した明治維新後の困難な状況の下で、西欧に於ける医学、医療の発展を取り入れた。最終帰国前に大阪医学校で行った抱獨英口授『日講記聞』（1870・明治3年）の「原生学」は、神経編から始まり飲食消化編で終わっている等、内容の構成に変化がみられる^{26) - 28)}。「十年前二較フレハ其説大ニ精確ヲ得タリ」として、旧説と今説を述べ、当時の顕微鏡検査、化学的検査、解剖学的検査によって今説を説明しているが、それを理解し、研究を行う条件は日本にはまだなかった。尚、この時、1869年に初めて彼によって静脈内注射が紹介されている¹²⁾。新しい医学書の入手も進んだのであろうか。

彼の弟、Bauduin, A. J. (1829～1890) は、1859・安政6年4月3日から1874・明治7年暮まで、長崎、神戸、横浜の各地でオランダ領事兼オランダ貿易会社駐日筆頭代理人として滞日した。最近、フォス・美弥子によってその時期の書翰集が和訳された²⁷⁾。原資料が示されていないのでオランダ語は不明であるが、フォス・美弥子の訳によると、1866年6月12日付の中に、「横浜 — この港を現在のように発展させたのは生糸の取引でした」、同7月5日付の中に、「横浜 — 今はかなり重要な町に発展しました」、1869年5月28日付の中に、「江戸 — 商業都市としてはそんなに発展していません」、1870年2月12日付の中に、「日本を未開国と呼んでいますが、それはあんまりではありませんか」といった個所がある。この兄弟にとっても ontwikkeling は用いられていた語であり、兄は「発育」の意味で、弟は商取引の「発展」の意味においてという、少なくともそれぞれの分野に於ける使用をしていたであろう事がうかがわれる。

② Mansvelt, C. G. van

Mansvelt, C. G. van (1832～1912) はオランダの海軍軍医であり、Bauduin, A. F. の後任として1866・慶応2年秋から1870・明治3年の初め迄、長崎精得館（1868・明治元年に長崎医学校と改称）に勤めた²⁸⁾。着任1年後に幕府の政治が終わると、幕府機関の一つである精得館の機能は一時停止した。更に1年後に明治政府の医業取締及び医学奨励に関する布告が出された。この間に長与専斎、井上聞多、Mansvelt, C. G. van らによって長崎医学校の改革案が作成され、1869・明治2年の初めからそれに基づく西洋医学教育が系統的に行われる事になった。医学校規則を定め、小学校と大学校の二科を設け、学生の資格を正し、学科序目と次序が定められた。「長崎府医学校規則並附録」によって次序を見ると、小学校教科は、「算学 第十等、究理 第九等、舍密 第八等」となり、大学校教科は、「解剖 第七等、人身窮理 第六等、病理学 第五等、内科 第四等、外科 第三等、薬剤包帯等 第二等、眼科産科一切治療並翻訳 第一等」と系統化されている^{28) - 29)}。小学校教科は、オランダの Utrecht の軍医学校の理化学教官であった Geerts,

A. J. C. (1843~1883) が担当し、大学校教科は Mansvelt, C. G. van が担当する事になった。以後 1869・明治2年の廃藩置県、1870・明治3年の大学規則の制定、医学教育の方針がドイツ医学に改められる等の事があり、Mansvelt, C. G. van も1871・明治4年春からは熊本治療所兼医学校に転出せざるをえなかった。

これ迄の調査では、長崎時代の彼の講義の蘭文筆記等を見出す事はできなかった。1871・明治3年に熊本に移って以後の授講ノートは大阪大学に保存されているので、次稿で取り上げる。時期は未詳であるが、満私歇児口授・藻寄中藏稿『内科新説』には「百病悉ク流動体変化ニ由ラサルナシ故ニ之ヲ病液学ト云フ病ニ於テ液ノ変化ヲ検査スル意ナリ中世ニ至テハ百病悉ク固形体変化ニ由レリトス」として、液の「分量変化」や血液の「分配変化」が論じられている²⁹⁾。彼もやはり液体病理学の立場に立っているが、Bauduin, A. F. の場合と同様、大学東校がドイツ医学の採用に移る1870年代以降になるとその講義内容も、この『内科新説』で述べているものとは変わり始めている。

3) 蘭医学書の和訳において

1860年代にオランダ医学を直接オランダ軍医等から学ぶと共に、彼らによって齎らされたヨーロッパ諸国医学の細胞病理学への移行直前の蘭訳書を含む蘭医学書の導入とその和訳も進んだ。しかし、当時の維新前後の混乱は、伝染病や銃創などへの対応に迫られ、和訳もそれらに重点がおかれざるを得ず、何よりも細胞病理学等を理解する実験的基礎は未だなかった。

① 佐藤尚中の訳書について

佐藤尚中 (1827~1882) は儒学を寺門静軒に、蘭医学を佐藤泰然に学び、その養子となってから松本良順について Pompe van Meerdervoort, J. L. C. からオランダ医学を学んだ²⁰⁾。それ以前の彼には『縷帯須知則』、『翁氏動脈施術論』、『暗氏経験記』(いずれも1850・嘉永3年前後とされる)、『穆氏格列羅説』(1858・安政5年)があり、更に Chelius, M. J. von 『Handbuch der Chirurgie, zum Gebrauch bei seinen Vorlesungen』(1822~1823)を Pool, G. J. が『Leerboek der Heelkunde』(1834)として蘭訳したものを、『施利烏斯瘍学全書』(1859・安政6年)として重訳している^{30)-①}。長崎滞在中には Wunderlich, C. A. 『Handbuch der Pathologie und Therapie』(1852~56)を、恐らくはポンペらが一部蘭訳したものを『雲蛭児理勞療略血篇』(1861・文久元年)として重訳し^{30)-②}、又、Stromeyer, G. F. L. の『Maximen der Kriegsheilkunst』(1861)の蘭訳を『斯篤魯黙兒砲瘡論』(1865・慶応元年)として出版^{30)-③}、続けて Stromeyer, G. F. L. の『Handbuch der Chirurgie』(1845)の蘭訳も『外科醫法』(1865・慶応元年)として訳出している^{30)-④}。それ以後、Niemeyer, F. von の『Lehrbuch der spez. Pathologie und Therapie』(1858)を Zeeman, J. が『Leerboek der Bijzonder Pathologie en Therapie』(1867)として蘭訳したものを『済衆録』(1869・明治2年)として重訳している^{30)-⑤}。幕末明治の動乱の中で専念した本書の翻訳は、1879・明治12年から1882・明治15年までかかって刊行された。これらの内、『施利烏斯瘍学全書』(1859・安政6年)には、第72章に「全身ノ諸症ヲ発生」、第92章に「癥痕発生ノ間」等にみられるように新形成物の「発生」と、第14章の「寒腫ノ発成」のように、それが集合体として「発成」に至る事とが区別して訳されている。これは松本良順が『朋氏解剖説』巻之三の最後で「淋発管ノ発成」をそこに至る「発生」と区別して訳していたのと共通している。

Wunderlich, K. A. のテキストの方は, Pompe van Meerdervoort, J. L. C. や Bauduin, A. F. が使用している。和訳にも佐藤舜中重訳『雲蛭兎理勞療略血篇』（1861）だけでなく, 篠原俊庵通辨『雲泥留理屈内科口授』（1865）がある^{30)-(2), 25)-①}。原典, 蘭訳と重訳相互の比較検討はできないが, 肺結節のところの訳語でみると, 佐藤尚中には, 「焮衝ヲ発頭スレハ」, 「情慾発動時之結節」, 「成人, 后更ニ肺勞ヲ発起シ易シ」, 「己ニ結節ノ発露スル者」, 「砂粒結節ノ発大セス却テ縮小硬固トナリ」等さまざまな表現が用いられているが, 篠原俊庵の場合は通辨口述のためか, 「発ス」のみである。

Stromeyer, G. F. L. の外科の関係書の詳細は不明である。訳語に「発生」の語はない。Niemeyer, F. von のドイツ語原書に基づく Zeeman, J. の蘭訳書は佐藤尚中によって『済衆録』として刊行されたが, 新宮涼民・涼閣共訳による『内科則』, 『續内科則』（1872・明治5年）もある³¹⁾。しかし, 内容が, 「呼吸器篇」, 「血行器病篇」, 「消化器病篇」から成って, 各疾患を論じ治療に及んでいるものなので, これまでの調査では, Zeeman, J. の蘭訳に *ontwikkeling* の語を用いている個所は見出し難かった。

② 坪井信良『侃斯達篤内科書』（1864・元治元年～1865・慶応元年）

坪井信良（1823～1904）は, 漢学を広瀬旭莊に, 蘭医学を小石之瑞, 坪井信道, 緒方洪庵に学んだ。1844・弘化元年に坪井信道の義子となり, 蕃書調所・西洋医学所教授を経て, 1864・元治元年に将軍奥医師, さらに法眼となった³²⁾。彼はこの年から, ドイツの Canstatt, C. が編集, Hensch, E. H. が増補改訂を行い, Dusseau, J. L. が蘭訳した『C. Canstatt's Bijzondere Ziekte-en Genezingsleer. I』（1857）の第1篇を, 坪井信良譯『侃斯達篤内科書』（1864・元治元年～1865・慶応元年）として重訳・刊行している³³⁾。3冊から成る Dusseau, J. L. の蘭訳書は, 第1冊目が937, 第2冊目が825, 第3冊目が776ページある³⁴⁾。第1冊目の第1篇は, 「Algemeene Stoornissen der Vegetative Levensverrigtingen」から始まって125ページある。坪井信良はこれを「補給機諸病」として6巻3冊に和訳したのであり, 広告によると百巻をめざしたが, 続刊はない。この期に刊行された原病論が液体病理学の立場を受けて血液神経諸病等から始まっていたのと同様, 本書も, 「補給機諸病」は「其一 血液製造諸病」, 「其二 血液循環諸病」, 「其三 滋養増減諸病」から構成されており, 次の「神経機諸病」に続いている。しかし, 内容には変化がある。即ち, 「Anomalën in de Voeding (滋養増減諸病—以下括弧内は坪井信良訳)」の「Boosaardige neoplasmata, carcinoma (悪性腫瘍—癌腫—)」(巻六—37)の「Ontleedkundige kenmerken (解剖症候)」をみると, 「人或ハ癌腫細胞ヲ以テ, 癌腫ノ確徴ナリトスルアリ, (ハンノベル氏, レベルト氏等), 又或ハ之ヲ非トスルアリ, (ウルセ氏, ホーゲル氏, ヒルショウ氏, ベンネット氏), (中略)—大細胞内ニ, 新細胞ヲ発生スル者ヲ, 癌細胞ノ固有ナリトスル者アレトモ, ヒルショウ氏曰ク, 全然健康ノ軟骨ニモ之アリト」(巻六—38～39)と, 対立する見解のある事が述べられている。続く「Ontwikkeling en Metamorphosen van den kanker (癌腫発生, 及續成)」では, 「或ハ曰ク, (ホーゲル氏, ヒルショウ氏, レトルト氏, 等) 癌腫ノ発生スルニハ, 必ス先ツ滲出液ト, 「プラステーム」トアリテ, 之ヨリ物質—變シ, 癌腫成分 (體細胞ヲ製造スルナリト, 又或ハ此説ヲ排斥シ, 癌腫ノ発生ハ, 上ニ記スルカ如ク, —局部ノ原質滋養ヲ變スレハ, 直チニ之ヲ生スル者ニテ, 猶肝細胞ノ癌細胞ニ變スルカ如シト, 今此ニ説ノ共ニ取ルヘキヲ説クヘシ (中略) 癌腫ノ成育スルニハ, 一ニハ周圍又内部ニプラステーム新ニ滲出スルニ由

り、一ニハ細胞體、更ニ發生スルニ由ル」との見解が述べられている。これはもう単純な液体病理学から変わりつつあることを示している。事実、この Canstatt, C. の1857年の増補改訂版が出版された翌年には Virchow, R. L. K. によって、「細胞は液体から」が否定され、「細胞は細胞から」とする細胞病理学の立場が登場したのである。その直前の Virchow, R. L. K. らの論争を含む書が坪井信良によって翻訳紹介されていた事になる。

この蘭訳書では ontwikkeling はもう通常用語になっており、「Ontwikkeling en Metamorphosen van den Kanker」は第1冊目の116～125ページであるが、ここでは ontwikkeling などの語は19箇所で用いられている。これらに対して坪井信良は大意訳で臨んでいるが、その際、同じ ontwikkeling の語でも意味に応じて訳語を変えている。大意訳なので、彼の用いた訳語の工夫に重点をおいて吟味を加えざるをえないが、坪井信良の場合には、新たに生じてくることに対しては「生スル」や「発生」を用い、それが単一の組織や機能として生長していく事に対しては「発育」をあて、更に、引き続き続成し組織の集合体などをつくる事に対しては「発成」を用いている。生成においてこうした区別をもった「発生」、「発育」、「発成」の用法を採用している事は、松本良順や佐藤尚中訳の場合にも「発生」と「発成」の關係にみられたが、ここでは三語が区別して用いられている。生成連関における吟味が整ってきている事を示しているといえよう。

その他、この蘭訳書で注目されるのは、和訳はされなかったとみられるが第1分冊目の第三篇第五部の「Geneesmiddeldyskrasiën」に「B. Ontwikkelingsziekten」の章（I-742～757）がある事である。しかもここには用語として、ontwikkelden, ontwikkelen, ontwikkeling, ontwikkelt, だけでなく、ontwikkelingsperioden, ontwikkelingsphase, ontwikkelingsproces, ontwikkelingsprocessen, ontwikkelingstijdperken, ontwikkelingstoestand, ontwikkelingsziekten, krachtsontwikkeling の8種類の合成語が用いられている³⁵⁾。更に第二巻の「Pathogenetische Consensus」の「II Aangeboren Hersenziekten」（79～81）には ontwikkelingsgebreken, ontwikkelingstrap, ontwikkelingsstornissen, warmteontwikkeling などの語が登場している³⁶⁾。しかし、これらの部分に、これ迄の調査では坪井信良その他による和訳を見出す事はできなかった。

坪井信良が行っている先の和訳の中で ontwikkelingsziekten に関連する箇所をみると、蘭訳書第1冊目巻之四の「出血」の部では「出血ノ多少、部位景況ニ關係スル諸因アリ」を訳して、その年齢の項で、「血液循環ノ引力、發育力ニ由テ増多」するとのべている所がある。「小児ハ頭部多血ナルカ故ニ、鼻血ヲ発シ易ク、少年ノ人ハ胸部多血ナルカ故ニ、肺血ヲ発シ易ク、中年ハ腹部多血ナルカ故ニ、胃血、腸血、痔血、腎血ヲ発シ易ク、老年ニ及ヘハ、脈管柔韌ノ質ト、弾力トヲ失シ、流通スル血液トノ平均ヲ失スルカ故ニ、脈管破裂シ、損傷シ易シ」（巻四-17～18）と訳されている。液体病理学の立場である。「遺伝出血」の所では「凡ソ此患者ハ、他病ニ於ケルカ如ク生力発成ノ期、時令變換ノ候最モ危フシ、故ニ生牙ノ期、早春等ヲ危険ナリトス」（巻四-56）と訳されている。最後の箇所は蘭訳書では次のようになっており、「発生」と「発成」の訳の区別がなされているのがわかる。

Even als voor zoo vele andere ziekte-toestanden, zijn ook voor de idiosynkrasia haemorrhagica de ontwikkelingstijdperken in het leven en de verwisseling der getijden in het jaar de meest gevaarlijke oogenblikken; aldus is het tijdperk van het tanden krijgen, de vroege lente enz. (79)

尚、坪井信良譯『侃斯達篤内科書』（1864～1865）は、Canstatt, C. による『Bijzondere Ziekte-en Genezingsleer』を1857年に Dusseau, J. L. が蘭訳した書を用いたものであるが、蘭訳書には、Hageman, H. H. による『De Bijzondere Ziekte-en Genezingsleer』（1848）もある³⁷⁾。これは旧版であり、ここでも「Inleiding」で、ontwikkelingsziekten の説明が行われている³⁷⁾。

本蘭訳書は適塾蔵書であるが、これらの個所の和訳も見出されていない。

③ 島村鼎甫『生理発蒙』（1866・慶応2年）

島村鼎甫（1830～1881）は、儒学を後藤松陰、蘭学を適塾で学び、医学所の教授、のちに大学東校の中教授になった。訳書に李邈氏撰・島村鉉仲譯『生理発蒙』（1866・慶応2年）愚略周著・島村鼎甫訳『瘡痍新説』（1866・慶応2年）があり、その他に多くの蘭訳書等の校閲を行っている³⁸⁾。

『生理発蒙』は Lubach, D. の『Eerste grondbeginselen der natuurkunde van den Mensch』（1855）を和訳したものとみられる^{39), 40)}。

島村鼎甫は、「生理科ノ如キハ之ヲ二三十年前ニ較フレハ殆ント其面目ヲ一新セリ」と述べ、しかるに初学者用に専門全備した書がないので訳出したとしている。確かに、それ迄の高野長英『西説醫原樞要』（1832・天保3年）、小関三英『西醫原病学』（1832・天保3年）、緒方公裁訳『羅説人身窮理』（1832・天保3年）、堀内素堂・黒川良安・青木研造重譯『醫理學源』（1844・天保15年）、箕作阮甫重譯『人生鏡原』（時期未詳）、廣瀬元恭重譯『利攝蘭度人身窮理書』（1855・安政2年）、同譯『知生論』（1856・安政3年）、川本幸民譯『依百乙菲叔碌義』（時期未詳）、新宮涼庭譯『人身諸液分析究理書』（1859・安政6年）等の生理学書と比べてみる時、内容の充実は著しい。

『生理発蒙』は各巻に校本者が明記されているが、ontwikkeling などの訳は以下に紹介するように共通した特徴を把えており、訳語を変える点にも一貫性が保持されている。少なくとも松本良順から佐藤尚中、坪井信良へ移ることによってみられた生成連関における新しい訳語の工夫は、島村鼎甫によって更に医学の発展にふさわしく徹底して整えられ、多くの校本者にも共有されていったのではないかとみられる。ここでは坪井信良の場合と同様に島村鼎甫の大意訳『生理発蒙』に於ける訳語の特徴を巻之十二「発育」を中心に検討する³⁹⁾。

巻之十二の前に、巻之十一に「神経系越歴気之論」と「脳脊髓功用之論」がある。後者で、「精神ノ用ヲ唯脳質ノ顕證ニノミ就テ究明スル学」として「摩的利亞斯母 (materialisme)」を論じた後、Gall, V. の「相脳学 (Phrenologie)」を取り上げ、「脳器ノ発生充實」を述べている所がある。原典312～316ページで、その間に20個所で ontwikkeling などがその説明に用いられている。続く、原典322 ページからが第4編第1章「Blik op de ontwikkelings-geschiedenis (発育)」であり、第2章「Ontwikkeling van hei ei (胚胎発育)」(322～336)と第3章「Voortgaande ontwikkeling van den mensch na de geboorte (生後発育)」(326～346)等が、当時判明した生成の事実の記録として述べられている。原典では約40ページの間70を越える個所で ontwikkeling などが用いられていることになる。この巻之十二の和訳は和綴33枚で校本の担当は武居子順である。「胚胎発育」の章では、先ず前提として、「生殖保続ノ作用」を論じ、次に「胚胎発育ノ作用」を述べ、「脊骨屬」には「卵生族」と「胎生族」があるとした上で、ここで「発育ノ状態」、「體內ニ於テ発育」、「人類ノ受孕発育」(巻12-5)という訳語が用いられている。次に、男女の

生殖機能を述べ、受精後の個所で「子宮ニ下リテ其内ニ發育ス」(巻12-9)、「胚管漸ク發生シテ原質ト成リ終ニ二層ノ膜質ニ化ス」(巻12-10)と用いられている。但し液体から細胞體が發生する見地を採っていることは、「此(洞)管内ニハ速カニ一種ノ液ヲ盈實シテ後來此液ヨリ腦髓及脊髓ヲ生ス」(巻12-11)と述べられている事からも明らかである。こう述べた後で、「此洞管ノ下際ニ於テ別ニ一條ノ細溝アリ(中略)後來此處より一條ノ軟骨質ヲ發生シ旁ラ其周圍ヨリ椎骨ヲ形成シテ遂ニ脊骨ト成ル但シ此衆骨ノ彎曲ハ背模ノ位置ニ由テ成ルナリ又此背模ノ發生スル際ニ於テ基溝ノ兩側ヨリ胚宮ノ外層膜葉(中略)隆起シテ漸ク下方ニ延長シ相圍ンテ一空洞ヲ成スコレヲ腹模ト曰フ後來此中ヨリ呼吸器及消食器ヲ生ス」、「脊髓漸ク發生シテ管内ニ盈ル寸ハ其一端稍潤ク成リテ此處ニ三裂ノ胞体ヲ生ス是即チ後來頭蓋ト成ルナリ又斯ノ如ク漸ク發育シテ其頭顱ノ一端ヲ顕然見ルヘキニ至レハ(後略)」(巻12-11~12)等と述べた後で「以上發育スル所」と受けている。

このように、ここまでの大意識においては、通常における新形成物が「發生」し、それが「〜ト成リ」或いはさらに「〜ト化ス」順序性が把握された上で、そのようになる単位過程に対して「發育スル」が当てられている。

この後に於いては、「脈絡膜ヲ漸ク發生シ」、「多ノ細胞體ヲ發生推積ス」として、これらが「後來心臟ト為ル」事が述べられ、「斯ク諸部ノ發育スル際ニ於テ」と受けている。これらに伴って「相離ルルニ隋テ生スル」腹腔などには「形成」が当てられている。(巻12-12~13)。漿膜や溺膜に於いてもほぼ同様の説明があり、それらが「全ク發生」した所で「發生」の語が用いられている。一方、膜そのものに就いては「血絡膜ノ長育ニ隋テ」とか、「溺膜速カニ長育シテ」と「長育」が用いられている(巻12-13~14)。

続いて、「胚胎發育ノ次第」が述べられている。それは、「大約第三月ノ終リニ至ル」として、各種器管の「生ス」る順序と、その後の器管の「發育」が記されている(巻12-16~17)。更に補足説明で、「卵珠發育」を述べた所でも、「細胞體ヲ發生」、諸器管の「發育生長速カニシテ」と、このレベルでの新形成物の「發生」と器管の「發育」が使い分けられている(巻12-16~18)。又、「卵珠發生ニハ前中後ノ三期アリ」として、前期の説明には「發生」が、中期の説明には「發育」が、後期の説明には「發生長育」が用いられ、第八九月ニ至レハ體力俱ニ發生充足シテ生後猶ホ能ク外来ノ刺衝ニ抗抵シ得ル者ナリ(巻12-18~19)と大意識が行われている。

即ちここ迄に於いては、細胞體の「發生」-「發育」、器管の「發生」-「發育」、卵珠から胎児への「發生」-「發育」が、そしてその全体が「胎児ノ發生」としてまとめられている。それ迄の、それぞれのいわば発達の階層にあたる所で、「發生」と「發育」が区別して用いられ、最終的には胎生期の全体が「胎児ノ發生」としてまとめられている事になる。

こうしたいわば発達の各階層内の生成に於ける区別とその全体を総合してまとめる認識の仕方は、出生後の發育にもみられる。即ち「胎児發生ノ大要」を述べた後、次には「生後大人ニ至ル迄ノ長育」を「生後發育」と略記して論じている(巻12-21~33)。ここでは、一つには出生時にそなわってきている児体や諸器管に就いては、「體器漸ク發育」、「児體發育」、「児體ノ生生發育」、「一身諸部ノ發育」等として「發育」が用いられている。その他、同義語として「嬰兒ノ長育」もある。次に、出生後に新たにそなわってきた機能や組織、特徴に就いては、「視力ノ發生」、「腦ノ作用漸ク發生」、「智慧發生ノ初期」、「智慧愈々發生」、「乳齒ノ初生」、「乳齒ノ再再發育

生」,「體器ノ發生」,「男子ト女子トノ發生長育」,「人身ノ發生長育」,「才能智識モ亦自ラ發生充實」等,新形成物や新機能に対して「發生」が用いられている。更に,出生後に新たにそなわってきた諸機能や諸組織等の集合に関しては,「五官ノ作用(中略)其發成」,「言語作用ノ發成」,「嬰兒ノ發成長育」,「肢體ノ筋骨較全ノ發成充實」というように「發成」が用いられている。その他に,身長を中心に,「身ノ長ケ(中略)成長」,「小兒一身ノ成長」,「成長ノ初期」と,ここでは「成長」が用いられている。少ないが「諸骨漸ク成育」の用法もあり,以上の全体をまとめるものとして,「嬰兒ノ初生ヨリ齠齔ノ期ニ至ル迄即チ七八歳迄ヲ幼齡ノ前期ト曰ク」,「又齠齔ノ齡ヨリ十五六歳ニ至ル迄ヲ幼年ノ後期ト曰フ」として,ここ迄を「小兒ノ發生」とまとめている。

これ以後,「成長シテ人トナル者」として,「通常女子ハ十四五歳男子ハ十六七歳ヲ以テ成長ノ初期トス」をあげ,「是時ハ肢體ノ筋骨較全ノ發成充實シテ」とその諸特徴を述べ,「蓋シ人身ノ發生長育シテ此ニ至ルモ尚ホ氣力筋骨共ニ未タ全ク充實セス故ニ大人ノ年紀ヲ前後二期ニ分チ前期ヲ弱年ト曰ヒ後期を壯年ト曰フ凡ソ人成長シテ二十歳以上ニ至レハ一身百骸ノ官能悉ク具ハリテ一致調和シ隋テ才能知識モ亦自ラ發生充實ス即チコレヲ人ノ壯年期トス」(巻12-28~29)とまとめられている。また,「人ノ全ク成長スル時」は,として「男女ノ別」を述べ,更に「真率・豁達ナル人ハ血管系ノ發生盛ニシテ血液運行ノ速カナルニ關カリ鬱悒沈黙ナル人ハ此官能ノ遲滯スルニ因ル故ニ若シ各人ノ腦ヲ除ク外ニモ其他衆器諸系ノ發生各々過不及ナクシテ百般ノ官能全ク一致整調スル寸ハ亦各人ノ思慮行為ニ於ルモ何ソ其性質ヲ甚シク異ニセンヤ」(巻12-33)等と述べられている。用法の基本は「小兒發生」場合と共通している。

1866年の幕末において,鳥村鼎甫は ontwikkeling の生理学分野に於ける訳を,初期的とはいえず,各発達のいわば階層的区別の下に,多くの場合を各系の生成連関において,徹底したものとして遂に訳し分けた。それは通常の場合の通常の発生過程に於ける用法であるが,先に松本良順によって通常の場合と,通常ならざる悪性,良性なるものの新形成物,更に通常組織等の発生障害の発生がそれぞれ区別して扱えられており,佐藤尚中や坪井信良に至る人たちによって生成連関における認識が「發生」と「發成」,あるいは他に「發育」として把握されてきた事を経て達成されたものとみる事ができる。ここに至る迄,長年月にわたり,多くの通詞や蘭学者の努力があった。中でも蘭医学者とりわけ宇田川,大槻,坪井,緒方などの学統とそこで学んだ諸成果の蓄積は大きいとみられる。彼らの蓄積した諸成果は,直接,間接に開国を支え,国交に協力をすることにもなった。その過程でオランダ人教師から直接,系統的に学問の成果を取り入れ,新訳の吟味を重ねる事ができた。それは医学所や開成所といった教育機関等を介しての蓄積となり,更に,明治政府による近代化の推進に必要な学問的準備をする事にもなっていった。この時期に蘭医学は新訳の共有を行い,その過程で ontwikkeling などの意味も,1850年代迄のように「發生」を基本としたものだけでなく,いわば個人内の発達における各階層における各種の生成連関に於いて区別と総合を行って訳し分ける迄になったのである。これには欧米に於ける1800年代中頃の科学,技術,制度や文芸等の発展と,そこでこの語が諸分野で諸分野にふさわしく用いられ始めた事が反映したものである。それはこの語が,語としての生成の原動力を必然としているからでもあろう。しかし,それ故に,そこで示される生成の原動力としての矛盾は,各地,各時代の具体的制約をも反映せざるを得なくなる。この語の導入における初期発生は,蘭医学分野

で、通常の場合と通常ならざる悪性、良性の新形成物、あるいは通常組織等の発生と発生障害を通じて、人間の個人内に於ける生成連関に区別と総合を行いつつ、語としての適用をいわば「発育」させてきた。一般的に語の生成を、発生、発展と高次の結合に於いて認識するとすれば、ここには *ontwikkeling* とそれに対する訳語の19世紀後半における発展の姿が示されているといえよう^{1)~3)}。これは今後、どのような生成の内的合法則性の把握との関係で更に高次の結合を達成していくのであろうか。それには科学の更に極めて高次の発展が不可欠となる。その前に、この語は19世紀の科学の水準で、より広く個人間に於ける社会的諸関係の下での生成連関を把えざるを得なくなるであろう。社会科学、人文科学的諸領域に於ける個人間生成の認識でも、これ迄みてきた個人内生成の認識の場合のような区別と総合が行われ、訳し分けが実現できたのであろうか。実現できたとすれば、それはどのような連関に於いて行われ得たのであろうか。

3 社会科学、人文科学分野の場合

1860年代になると、洋学は蘭学から英学等へ拡大を始めた。その過程にあつて、1860年代後半になると、文明開化と近代化に求められる社会科学、人文科学分野の蘭訳書あるいは参考とされたオランダの行政資料に於いて用いられている *ontwikkeling* などの語に対する訳出が行われるようになった。これらは初めての本格的な取り組みであった。そこで導入にはどのような特徴があったのであろうか。

ここでは *ontwikkeling* などの訳出が行われている書として、神田孝平重訳『経済小學』（1867・明治元年）と、内田正雄訳『和蘭学制』（1869・明治3年）を取りあげる。

1) 神田孝平重訳『経済小學』（1867・明治元年）

『経済小學』（1867）は、Bentham, J. の門人で、Mill, J. S. とも親しかったとされる英国の経済学者 Ellis, W. の『Outlines of Social Economy』（1850）を Graafland, H. H. が『Grondtrekken der Staatshuishoudkunde』（1852）として蘭訳した書を、神田孝平が日本語に重訳したものである^{41), 42), 43), 44)}。

Ellis, W. は原典の少なくとも8個所で *development* などの語を用いている⁴³⁾。そのすべては、Graafland, H. H. によって *ontwikkeling* などと訳されている⁴⁴⁾。これを神田孝平がどのように重訳したのかを原典、蘭訳、和訳の順に該当個所を取り上げて対応を調べる。

まず、本書の上編では、*developed* の蘭訳が *ontwikkeld* などとして2個所に用いられている。いずれも「Wages (Arbeidsloonen—雇直)」の章である。今日の賃金の個所である。

① 文明化のあまり進んでいない社会状態と一層進んだ社会状態とでは、資本の多寡によって物事を行う力に相異のある事が次のように述べられている。

(Ellis, W.) 「In the less civilized, capital is small, power undeveloped,」 (20)

(Graafland, H. H.) 「In de minder beschaafde is het kapitaal klein, zijn de krachten niet ontwikkeld,」 (22)

(神田孝平) 「大抵未開ノ国ニ於テハ財本少ナク器力ヲ発ス事ヲ知ラス」 (上・14)

ontwikkeld は Maatschapij 『Syntaxis』の大庭雪斎訳『譯和蘭文語後編』（1857）では「発生スル」、高橋重威『和蘭文典字類後編』（1858）では「奮起ス」となっていた語である。神田孝平は

「発ス」を基本としており、それはこれまでの19世紀蘭医学の生理学や病理学で用いられ始めたものと同じ訳出である。

② これは次例の訳にも引き継がれている。

(Ellis, W.) 「In the more civilized state, capital is large, power developed,」 (20~21)

(Graafland, H. H.) 「In den meer beschaafden staat is het kapitaal groot, zijn de krachten ontwikkeld,」 (23)

(神田孝平) 「頗ル文明ノ国ニハ財本多ク種々ノ器力アリ」(上・14)

次に本書の下編では上編より多く、6個所で使用されている。

③ 先ず、上編と同じく「Wages (Arbeidsloonen)」の個所で用いられている。

(Ellis, W.) 「They will all be sharers in profit; and their children, whose numbers have been proportioned, by parental solicitude, to the means for rearing them, will be allowed to develop their growth, strength, intelligence, and disposition, under circumstances favourable to their future wellbeing as individuals, and to their future bearing as members of society.」 (61)

(Graafland, H. H.) 「Zij zullen allen deelgenooten van de winst zijn; en aan hunne kinderen, wier getal door vaderlijke voorzorg geëvenredigd is aan de middelen om hen te onderhouden, zal het vergund zijn om hunnen groei, hunne krachten, kennis, verstand en neiging te ontwikkelen, onder omstandigheden, gunstig voor hun toekomstig welzijn als individuën en voor hun toekomstig onderhoud als leden der maatschappij.」 (67~68)

(神田孝平) 「人々富貴利達ノ良民ト為リ許多ノ子ヲ養フ事ヲ得テ其成長ヲ扶ク精力ヲ練リ智識ヲ磨キ德行ヲ修ムルノ道ニ導クカ故ニ其子モ亦成人ノ後一箇ノ美丈夫トナリテ國中士君子ノ列ニ就ク事ヲ得ヘシ」(下・7~8)

賃金を得る事によって誰もが利益を受けるし、養育能力に相応しい人数だけ授かった子どもたちは、各自にとって将来の幸福や社会の一員としての好ましい環境の下で、自らの成長や力強さ、知能及び性質を発達させる事が可能になるであろうと述べている所である。

上編を含めて、ここ迄の論述では develop に ontwikkelen があてられて、神田孝平はそのすべてに直接対応させた訳をしているのではないが、ほぼ「発ス」の意味をつけているといえよう。但し、ここ迄には未だ ontwikkeling は登場していない。

④ 「Foreign Commerce (Buitenlandsche Handel - 外国交易)」では、外国貿易が世界中に分業を発達させ、それを拡張することになると述べた所で、Ellis, W. の用いた名詞 development に対応するものとして Graafland, H. H. は ontwikkeling をあてている。

(Ellis, W.) 「Foreign Commerce is the development and extension of the division of labour throughout the world at large.」 (79)

(Graafland, H. H.) 「Buitenlandsche handel is de ontwikkeling en uitbreiding van de verdeling van den arbeid de gansche wereld door.」 (88)

(神田孝平) 「外国交易ハ分業ノ法ヲ世界萬國ニ推シ廣ムルノ謂ナリ」(下・20)

この ontwikkeling は、大庭雪斎『譯和蘭文語前編』(1855)で「了解スル」、飯泉士讓『和蘭文典字類前編』(1856)で「^{トキアカシ}鮮」と訳され、蘭医学では「発生」を基本に「発育」、「発成」というようにその意味が把えられ、生成の区別と総合に於いて適確に用いられ始めていたもので

あった。こうした蓄積の上に社会科学用語としての検討が加えられ始めたのであろうか。貿易において *ontwikkeling en uitbreiding* には分業を「推シ廣ムル」があげられている。本稿1の蘭語学の『熟語集』で *ontwikkelen* の訳に「大メル」が登場していたが、本書のような訳の影響もあったのであろう^{61)・①・②}。ともあれ、開国後の争点となっていた貿易の是非を国内産業との関係で長期に把握する視点が導入されている。

⑤ 「Freedom of Trade — Restriction (Vrijheid en Beperking van handel — 自在交易制限交易)」の章では、*ontwikkeling* に対応する神田孝平の訳に、初めて「発達」の訳語が登場している。

(Ellis, W.) 「Can law do more than all this to assist man in the development of his productive powers?」(84)

(Graafland, H. H.) 「Kan de wet nog meer doen dan dit alles om de menschen in de ontwikkeling hunner krachten bij te staan?」(93)

(神田孝平)「右ニ載スル所ハ皆民力ヲ助ケテ発達セシムル所似ナリ試ニ問フ律法ノ用此ニ盡ルヤ」(下・23)

ここでは、その前に「克己自制」, 「学識上達」, 「資本集合」の三事を述べた上で、これらは人びとの生産的諸力の発達を援助するものであるが、法律にできる事は、これらを助ける事に尽きるものであろうか、と問うて税法の説明に移っている。その際の自問で「発達」の訳語が用いられているのである。

⑥ 「Machinery (Werktuigen — 器械)」の所では、次のように用いられている。

(Ellis, W.) 「Machinery, in every form of its development, is the extension of those limits which seem to be imposed upon the productive powers of the earth. Its progress is marked by cheapness and abundance.」(90)

(Graafland, H. H.) 「De werktuigen zijn op elken trap van hunne ontwikkeling de uitbreiding van die grenzen, welke aan de voortbrengende krachten der aarde gesteld schijnen te zijn. Hun vooruitgang wordt door goedkoopte en overvloed gekenmerkt.」(100)

(神田孝平)「夫レ器械ハ大地ノ発生力ヲ扶ケル者ナリ故ニ一器ノ創造アル毎ニ必ス一層ノ発生力ヲ加フヘシ器械次第ニ開クレハ世上品物愈々増加シ愈々廉價ニ趨クヘキノミ」(下・26)

機械類はその発展が如何なる形態をとるにせよ、土地の生産的諸力に課せられている限界を押し広げるし、機械類の進歩は、そこから生み出されるものが安くて豊富である事によって特徴付けられることが述べられている。

⑦ 「Taxes — Indirect (Indirecte Belastingen — 間税)」の章では、*ontwikkeling* に対して本書で2つ目にあたる「発達」の訳語が登場している。

(Ellis, W.) 「They who are not familiar with the customs and excise laws hitherto prevailing in the world, and are not practised to detect the sophisms, the prejudices, and the delusions by which they have been maintained, will scarcely credit the amount of loss and waste which man has by such means imposed upon himself; unwittingly crippling his own energies, and preventing the development of his own resources.」(103)

(Graafland, H. H.) 「Zij, die niet gemeenzaam zijn met de inkomende regten en accijnsen, die tot heden in de wereld heerschen en die niet geoefend zijn, om de drogredenen, de vooroordeelen en de begoochelingen, waardoor zij in stand gebleven zijn, te ontdekken, zullen naauwelijks het bedrag der verliezen en der schade, welke de menschen zich door zulke middelen be-rokkend hebben, gelooven, die onwetend hunne eigene krachten verminken en de ontwikkeling van hunne eigene hulpbronnen verhinderen.」(114～115)

(神田孝平)「若シ人世上流行ノ税法ニ熟セス且種々ノ姦情ヲ発スルニ慣レサルカ如キハ平生姦人ノ侮ヲ招キ損害ヲ受ケ自己ノ力次第ニ減縮シ発達ノ途次第ニ梗塞スルト雖モ之ヲ覚知セス之レ實ニ憐ムヘキ者ト雖元来ハ税法ヲ講セサルノ過ヨリ出ツルナリ」(下・35)

ここでは、世間に普及している関税法や物品税法の事をよく知らずに、自分が詭弁や偏見、妄想に取り付かれてきた事に気付きにくい人びとは、自分自身の活力を知らず知らずの内に失わせ、また自分自身の資力の発達を妨げるようなやり方で自らに負わせてきた損害と浪費がどれ程大きなものであるかを信じようとはしないであろう、と述べている所で用いられている。税法を知り、制度を整える事が自らの資力を発達させる事になるとの論調である。

⑧ 「Conclusion (Besluit-結尾)」では、ontwikkeling に対して3つめの「発達」の訳が与えられている。

(Ellis, W.) 「It is his reasoning faculty, dormant in childhood, but capable of a development, the limit of which it is scarcely possible to conjecture.」(114)

(Graafland, H. H.) 「Het is de gaaf der rede, die in de kindschheid sluimert, maar vatbaar is voor eene ontwikkeling, waarvan het naauwelijks mogelijk is de grens te beseffen.」(127)

(神田孝平)「人生来道理ヲ具スト雖之ヲ研カサレハ甚タ微ニシテ殆ト無キニ至リ又之ヲ研ケハ次第ニ発達シテ其際限ヲ見ルコトナシ」(下・42)

結論の一つとして、人間の合理的に判断する能力を述べた所で、その能力は児童期には発揮されないが、それ以後になると限界を押し量ることができない程の発達が可能であるとまとめられている。

以上のように、本書の上編の後半、賃金の所から ontwikkelen が使用されている。文明による開発が行われれば資本の蓄積が行われ、器力が発揮されるという認識の下で「発ス」るものに用いられ、下編では人びとにとっては賃金を得る事によって家族や各自の幸福や能力を発揮する事ができるとされる。外国貿易によって、分業が進む。ここで初めて ontwikkeling が登場する。訳は「推シ廣ム」である。それ以後、克己自制、学識上達、資本集合がそなわるならば「民力ヲ助ケテ発達セシムル」事ができるというように、資本主義的構造と貿易、そこで求められる初歩的な内部規律と条件の存在を前提として、更にそこに法的・制度的対応の必要性が求められる社会科学的用語として、ontwikkeling が登場している。ここで初めて「発達」の訳語があてられた。そして、税制、特に間接税の導入を述べるに及んで、こうした制度が整っていくならば、成人になった各自の資力や能力はこれまでのような際限をみる事はなく「発達」していくことになるとして用いられている。「人生来道理ヲ具ス」所のものを「研ケハ次第ニ発達シテ其際限ヲ見ルコトナシ」と。さらに「発達ノ途次第ニ梗塞」しない為にも経済の運営を正すことに注意をうながす。その他のところでは、「太平富強ヲ致スノ道ヲ発悟スル」為に、「知識」と「風俗」を正

しくし、「富」を「蓄積」し、「満天下ノ人ト其利用ヲ俱ニ」する様に努める事が経済運営の要であるとも述べられている。素朴ではあるが、「各人ノ利益平均ヲ得」、「人生相資クルノ道」を実現する事が前提とされており、それらは「幼童教育」を行う事と、「経済ノ学」に通ずる事なしには実現しないとされる。

この書の中で Ellis, W. が用い、Graafland, H. H. が蘭訳した *ontwikkelen* の動詞から名詞 *ontwikkeling* の使用への転化は、経済理論の説明の中で、一定の構造や条件を伴ってくる所で行われている。更に貿易と税法の整備との関連で努力が実り、生産諸力、資力、そして人びとの諸能力が新しく発揮されていく所で用いられている。神田孝平はそれに伴って「発ス」、「推シ廣ム」、「発達」の訳をあてて、意味連関を把える努力をしている点が特徴的である。いわば社会的存在である人間を個人間関係で把え、そこに諸関係の生成と諸能力の発揮をみて、生成の相互連関に「発ス」、「推シ廣ム」、「発達」を対応させて、全体を人間の「発達」でまとめている。*ontwikkeling* が蘭医学で個人内生成連関の区別と総合に於いて認識されるに至ったと同様、社会科学では個人間生成連関の区別と総合において認識されて個人の諸能力も発揮されていく事がのべられている。一時期に限られるとしても、この直後の英学でも、中村正直が、Mill, J. S. 『On Liberty』(1859)を『自由之理』(1871~1872)とした訳出で、「spiritual development」に「心智ノ発生」、「moral and intellectual development」に「品行才能ヲ発出」、「individual development」に「独自一己ノモノヲ発達」をあてるというように、development の訳出を「発生」、「発出」、「発達」の生成連関に於いて認識しようとした努力にも連なるものであるといえよう⁴⁶⁻²⁾。1860年代後半の蘭学に於ける *ontwikkeling* の概念の導入が、医学では松本良順、佐藤尚中から坪井信良に続く島村鼎甫によって個人内生成連関において、経済学では神田孝平によって個人間生成連関に於いて、いずれも生成連関の区別と総合を認識して行われようとした事は貴重である。

では、神田孝平に於ける個人間生成連関の場合、その認識は外的決定論にはならないか。この点で、いま一つ注目されるのは、『経済小学』下編の5個所で *ontwikkeling* の和訳が行われる時には、「分業ノ法ヲ——推シ廣ム」であり、「民力ヲ発達セシム」ではなく「民力ヲ助ケテ発達セシム」であり、「発達ノ途次第二梗塞スル」であり、「之ヲ研ケハ次第二発達シ」である。いずれの用例も、どちらかといえば、不十分さは止むを得ぬとしても機械的な外的決定論に立つのではなく、内在的な価値を内発的に実現していく事が外的諸関係に於いて把えられている。そのような社会的生成連関に於ける各系の新形成物に「発達」の訳語が用いられているのである。これは、これより後、自由民権運動を弾圧し『皇室典範・大日本帝国憲法制定ニ関スル御告文』と『帝国憲法上論』(1889・明治22年2月11日)に採用されて以降、「発達」の語が官用語となり、絶対主義的天皇制の下で富国強兵策として個人の外在的な価値の実現のために、内在的なものを外的に支配・圧迫し機械的に働きかけて到達点を強調するために登場させられてきた「発達」の語の生成の経緯とは全く異なっている⁴⁵⁾。

注目されるいま一つは、蘭学、特に蘭医学の分野で「発生」、「発育」、「発成」というように生成連関に於ける区別をした上で新形成物を総合して、そこに「発生」の訳を与える手法が使用されていた。それによって堀内寛『幼幼精義』(1843開雕)の中で1個所用いられていた「生生発達」の訳語は、これ迄の調査によると、以来25年に亘って訳語としては用いられてこなかったとみられるものである^{1)-③)}。蘭医学、自然科学、産業技術の場合に、いわば死乃至休訳語になって

いた「発達」の語⁴⁶⁾が、社会科学の分野で、1860年代後半の蘭医学の場合と同様に生成連関に於いて扱われた上で、蘭医学とは異り個人間連関に於いて使用されるに至った。しかも制度的整備を前提としてである。それは単なる死語の復活ではなく、一方では、相学などで成人男子が世に出るとして用いられていた和語“幸いに至る”という「発達」の語のレベルとの結合である。しかし、江戸時代に於ける封建制の下での他者に依存して社会の仕組みを不変のものとした所での、いわば特例としての“幸いに至る”道との結合ではない。税制や教育を含むすべての面に於ける近代社会の実現を大前提とした新しい時代の社会に於ける結合である。従って江戸時代的な仕組みや行き方から、それに代わって多くの人びとが幸いに至る事ができる、より普遍性をもった幸せな生き方が実現できるようになるために、それを支える経済の仕組みの存在を前提とした道との結合である。ここでの「発達」の語は死語の単なる復活ではなく、新しい社会の仕組みが実現していく時代に於ける新生という面を持つといえよう。

逸早く幕府を見限って新政府に参加した開成所頭取神田孝平によって、慶応4年から明治元年に至る、將にその移行の只中である1868年に、本書が重訳され、次の時代の幕明けに贈られる事になった。他ならぬこの時に「発達」の訳語がいわば新たな社会的「発成」として、近代的な意味をもって新生した事は象徴的でさえある。当時の時代の変革に必要とみられた近代経済学の導入をする事によって、ontwikkeling の概念が社会科学的な生成連関に於いても認識でき始めたのである。

神田孝平（1830～1898）は、牧善輔、塩谷宕菴、安積良斎、松崎謙堂に漢籍を学び、Perry, M. C. が来航した1853年からは杉田成郷、伊藤玄朴、手塚律藏について蘭書を学び、福澤諭吉と長崎に遊学したと伝えられている。1862・文久2年には堀田正睦攝津守の家臣となって、蕃書調所、更に後には洋書調所に勤め、1868・明治元年には開成所の頭取になっている。以後、ここで取り上げた1870年までの短い期間に、議事取調、学校取調、会計官権、公議所、制度取調、大学大丞などの職を務めている⁴⁷⁾。

神田孝平には『経済小學』（1867）を刊行する迄に、『和蘭美政録』（1861）、『農商弁』（1861）、『和蘭王兵学校掟書』（1862）、『英船薩州戦争記』（1863）、『数学教授本』（1864）等があり、これ以後も『人心一致説』（1868）、『和蘭政典』（1868）、『政法略』（1870）、『和蘭司法職制法』（1872）、『和蘭州法』（1872）、『和蘭邑法』（1872）等があるが、これらのいずれにも「発達」の訳語が用いられているのを見出すことはできなかった⁴⁸⁾。

2) 内田正雄譯『和蘭學制』（1869・明治2年）

『和蘭學制』の卷一「小学條例」の第23章には、「発達」の語が次のように用いられている⁴⁹⁾。

「一 学校ノ教授ハ肝要ナル學術講習ニヨリテ童蒙ノ知識才力ヲ発達シ、教授ヲ為ラフ篤クスル事ニ導クヲ要ス 故ニ教授ヲ為スモノ善ク之ニ注意シテ教導ス可キ事 禁止ス可キ事 心術風化ニ利害得失アル事ヲ取捨ス可キナリ」（10）と。

即ち、学校の教育は必要な学問の成果に基づいて、児童の知識才能を発達させるように導くものであるとして、それだけに教師に求められる事項があるとされている。

本書は、内田正雄が1862・文久2年に第1回のオランダ留学生取締役等としてヨーロッパへ行き、1866・慶応2年に帰国、維新後は新政府に迎えられ、学校取調御用掛として、1857年8月13

日制定のオランダ法規「N^o. 103. Wet van den 13^{den} Augustus 1857. op het Lager Onderwijs」を訳出したものである。第23章の該当個所のオランダ語は次のようになっている⁵⁰⁾。

Art. 23. Het schoolonderwijs wordt, onder het aanleeren van gepaste en nuttige kundigheden, dienstbaar gemaakt aan de ontwikkeling van de verstandelijke vermogens der kinderen en aan hunne opleiding tot alle Christelijke en maatschappelijke deugden.

De onderwijzer onthoudt zich van iets te leeren, te doen of toe te laten, wat strijdig is met den eerbied, verschuldigd aan de godsdienstige begrippen van andersdenkenden. (後略)

この法規には他に「ontwikkeling」を見出すことはできなかった。

ここでは「ontwikkeling」の訳に「発達」の語があてられ、それが童蒙、つまり児童に用いられている事が注目される。先の神田孝平の場合は、その対象が人間である場合、どちらかといえば成人に対する発達に重点が置かれていた。両者の原典の性格にもよるが、江戸時代には、相学等で女性や成人までの対象には発育や成長が用いられ、成人になってからの男子に発達が用いられて区別されていたのとは異なっている⁴⁷⁾。新政府になって、新しい学校教育制度の導入という政策対象に幼児を含む児童が登場する事により、そこに「発達」が述べられるようになったのである。翻訳とはいえ、渡欧した旧幕府使節の留学生取締役の立場であった内田正雄によって、「発達」の語が初めて全ての児童を対象に用いられる迄になった所に新しい時代への用語上の変化をみる事ができる。

内田正雄(1838~1876)は昌平黌で学び、更に赤松大三郎に蘭学を、長崎海軍伝習所で航海や測量、砲術を学んだ⁵¹⁾。第一回和蘭留学生取締役としてオランダへ行き、パリ万国博覧会使節らをヨーロッパで迎え、帰国後は軍艦奉行にまでなり、明治政府の下で学校取調御用掛に任ぜられ、大学少丞として蘭学を講じたが、蘭学が廃止されてからは『輿地誌略』(1870・明治3年~)の編訳にあたった。その他に『海軍沿革論』(1869・明治2年)、『海外国勢便覧』(1870・明治3年)があるが、これらには発達の語が使用されている個所を見出す事はできなかった⁵²⁾。

第一回和蘭留学生中、発達の語を用いて論説を書いた者には、津田真道が『明六雑誌』で「新聞紙論」(1873)、「人材論」(1874)を記し、西周が同誌に「知説 五」(1873)を記して、それぞれ用いたのが最初であり、『明六雑誌』掲載の他の153論稿には未だ「発達」の語を見出すことはできない⁵³⁾。かかる点からする時、翻訳とはいえ、1869・明治2年の刊行書で児童の知識才能に「発達」の語をあてた内田正雄の見識は注目を引く所である。

3) その他、蘭学出身者の資料で「発達」の語が用いられているもの

以上の経緯からもうかがえるように、この頃になると「発生」や「発育」などの語は蘭学者の著作にもよく見られるようになっていく。しかし、相学以外の分野で、蘭学者によって、神田孝平や内田正雄のような新しい意味で「発達」の語を用いた著述をこれまでの調査からは未だ見出すことはできていない。だが、1869・明治2年と1870・明治3年になると、さまざまな用法ではあるが、次の4資料を見出すことができた。

一つは、坪井信道の養子、坪井信良(1823~1904)が実兄佐渡養順に宛てた書翰の中で発達の語が次のように用いられている^{54)、55)}。1869・明治2年5月10日付書翰の後半部分である⁵⁴⁾。

「近来世上之一大变革、古今万国無之紛乱、中々以テ此儘ニテハ相済間敷、実ニ英雄奮起発

達之時^(虫クイ)横行雄飛ニ候得共、竊カニ考思スレハ、多クハ是公明正大之論ニ^(虫クイ)スルナリ。唯宜シク我分ヲ顧ミ、危キニ不近耳。」

仲々慎重である。いま一通、1874・明治7年6月15日付書翰にも「発達」の語が用いられているが、これは次の時期になる。

2つは、蘭学者河野剛禎の『農業花暦』(1870・明治3年)である⁵⁶⁾。彼は「農ハ天下ノ大本」としてこれを作成、「季節教要」の「清明」では「早稲播種 中稲包浸」として、「此節に至りてハ春色已に充滿して桃季色をあらそひ草木新芽を生し陽気漸く発達して霜軽くなる時なれば春分に包浸する所の早稲を苗代に播くべし」と述べている。

春の陽気の到来に用いている。

3つは、備後喜六『勤業修養粗話』(1870・明治3年)である⁵⁷⁾。7個所で用いられている。「巳が道を尊信せ総バ発達ハならぬとのふり」(上・2)、「昔の立身発達せし人」(上・6、2個所)、「生業を勤め正路を歩めバすぐれたる発達ハせずとも」(上・22)、「立身発達する事なき人」(上・22)、「相應したる家業をすれば発達せずといふ事なし」(上・27)と用いられている。

これには蘭学からの距離が感じられるが、陰陽道に基づく他の相学とは異なった修身の道が述べられている。

4つは、横浜毎日新聞創刊号(1870・明治3年12月8日号)の創刊の辞である。この新聞はわが国最初の日刊新聞で、神奈川県令井関盛良が企画、社長には島田豊寛、編集担当には子安峻、印刷担当には陽其二があたった。ここで初めて新聞に「発達」の語が用いられるに至った⁵⁸⁾。

「新聞紙の専務ハ四民中外貿易の基本を立て皆自商法の活眼を開かしめんことの為本社ノ因て設けし所也謂商事の根元ハ全世界の動静を計り遠近之物価を参述し彼我の有無を公整する術と為す者也此道只外国交際の上にて而已然るにあらず 皇国内諸港ノ形勢を考渉志て商理之存する所を四海に較著にし諸民之智識を発達するハ此新聞紙之大功用に志て我か活板社の誠に企望する所也」

「諸民之智識を発達する」大功用を志て新聞を創刊するとある。これは、内田正雄『和蘭學制』(1869)の「童蒙ノ知識才力ヲ発達シ」と同じく新しい時代の用法といえる。これ迄の封建制の下で特例としての出世を願うのに留まらず、諸民の知識を発達するものとして新聞事業の位置付けが行われている。

この時期までに、1861・文久元年7月26日発刊の『官板バタバヤ新聞』、1861・文久元年12月2日発刊の『官板海外新聞』など、蕃書調所、洋書調所の蘭学者によって翻訳発行された不定期新聞はあった。その他に幾多の日本語の新聞や雑誌が発刊されている^{59)、60)、61)}。しかし、そのいずれにもこれ迄のものに「発達」の語が用いられているのを見出すことはできなかった。この点からする時、『横浜毎日新聞』の創刊の辞は出色といえよう。そしてこれは横浜という場所、スタッフの子安俊や島田豊らにみるように、蘭学のみでなく時代は英学の影響が重なってきている事、「発達」を巡る情勢もさまざまに現実化する時期を迎え始めた事を示している。

いよいよこの調査研究も、英学その他の洋学に於ける発達概念の導入の検討へと進まなければならない。

註

- 1) 蘭学における ontwikkeling の概念の導入に就いてのこれ迄の調査資料は下記にまとめた。

- ① 田中昌人：蘭学における発達の概念の導入について——堀内寛『幼幼精義』（1843・天保14年開離）まで——。京都大学教育学部紀要第39号。1993。182～217。
- ② 田中昌人：蘭学における発達の概念の導入について（2）——Pompe van Meerdervoort, J. L. C.による西洋医学教育の実施前まで——。京都大学教育学部紀要第40号。1994。12～46。
- ③ 田中昌人：日本における発達の概念の導入について——江戸時代に渡来した日本見在17・18世紀刊行洋辞書の検討——。京都大学教育学部Bコース共同研究報告論集Ⅲ——教育内容・教育方法と教育的発達——。1995。（近刊）
- 2) 江戸の坪井塾、佐倉の順天堂、尾張の洋学館、大阪の適齋塾等には当時用いられた Maatschappij の覆刻本で保存されているものがある。更に1857・安政4年からは蕃書調所でもこれが用いられた。東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』の「通史一」東京大学。1984.20～28。を参照。
- 3) 伊東朴斎訳：洋学須知 附録熟語箋。静観堂蔵版。1866・慶応2年。京都大学文学部文学科閲覧室所蔵本。
本資料及び他の熟語集等に就いては下記を参照。
- ① 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 II——蘭学者による蘭語の学習とその研究——。早稲田大学出版部。1977。1275～1280。
- ② 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 III——対訳語彙集および辞典の研究——。早稲田大学出版部。1978。886～904。
- ③ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 IV——蘭語研究における人的要素に関する研究——。早稲田大学出版部。1981。1034～1037, 1124～1132。
杉本つとむ^{3)-②}が指摘するように、海西漁夫（鶴峯戊申）識『和蘭熟語(字)集』（1857・安政4年）。奇雲齋蔵版。では「数字ヲ集メテ一語ヲナス者ハ是ヲ成語ト云ヒ、数語ヲ集メテ一語ヲ成ス者ハ是ヲ熟語トイフ」としていたが、伊東朴斎の場合には ontwikkelen のように複合語として一語を成す場合その他が含まれている。
- 4) 公莊徳郷・窪田耕夫同輯：洋学須知 附録熟語箋。未青堂。1859・安政6年。早稲田大学図書館特別資料室洋学文庫所蔵本。
- 5) 古田東朔の見解については、日蘭学会編：洋学史辞典。雄松堂出版。1984。727。を参照。辞典文中の伊藤朴斎は伊東朴斎の誤りである。
- 6) 著者未詳の熟語集としては、これ迄に次のものを調査した。
- ① 著者未詳：熟語集。時期未詳。佐澤氏記。東京外国語大学洋学文庫所蔵本。
- ② 著者未詳：熟語集。時期未詳。上山藩奥山又三郎蔵。雄松堂フィルム出版製作マイクロフィルム版「初期日本蘭仏独露語文献集。R20。に所収。
- 7) 例えば、国立歴史民俗博物館佐藤道夫家寄託資料で、又新斎蔵書印のある必明堂蔵の原稿用紙を用いた『熟語集』には ontwikkelen の記入はない。
その他、慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館所蔵富士川本には著者未詳『〔蘭語解〕』（時期未詳）がある。この中の筆写蘭文中に「ontwikkelen」と訳が付けられている個所がある。これは『熟語集』などにある「訳キ明ス」と同義の用法であろう。尚、この『〔蘭語解〕』は京都大学文学部文学科閲覧室所蔵の初期蘭学時代の『蘭語解』とは異り、『遠西奇器図説』やボイスの書を読んでのメモ書きなどがふくまれている。
- 8) 緒方富雄：大槻俊斎とその時代。蘭学資料研究会研究報告第64号。1960。（「復刻版」蘭学資料研究第4巻。1986。124～139。）
- 9) Pompe van Meerdervoort, J. L. C. が実施した西洋医学教育に就いては次を参照。
- ① Pompe van Meerdervoort, J. L. C. : Vijf jaren in Japan (1857～1863). Leiden. 1867～1868. 京都大学附属図書館特別資料室所蔵新宮家旧蔵本。
- ② ①の翻訳として、ボンベ著、沼田次郎・荒瀬進訳：ボンベ日本滞在看聞記——日本における5年間——。新異国叢書 10。雄松堂書店。1968。を参照。
- 10) Pompe van Meerdervoort, J. L. C. の受講生の記録としては次を参照。
- ① 小川鼎三・酒井シヅ：松本順自伝・長与専斎自伝・平凡社。1980。

- ② 関寛斎：長崎伝習館日記。佐倉順天堂佐藤道夫家所蔵と伝えられているが、国立歴史民俗博物館には寄託されておらず未見である。
- 11) 長崎大学医学部編：長崎医学百年史。長崎大学医学部。1961。この内、ポンベに関しては、西洋医学教育発祥百年記念式典講演 山崎佐。23～47。同緒方富雄。48～70。と中西啓：長崎医学の百年。23～96。を参照。
- 12) 藤井尚久：医学文化年表。日新書院。1942。138～155。
- 13) 「Pompe van Meerdervoort, J. L. C.」・佐藤尚中筆写：（朋氏病理論）— *Algemeene Ziektekunde*。佐倉順天堂蔵。第3分冊目の後記に「Desima. 4 Jan. 1860.」とある。国立歴史民俗博物館佐藤道夫家寄託本。但し、寄託本は第2分冊と第3分冊である。
緒方富雄論文²¹⁾では、この講義は1959・安政6年1月10日に開始されたと記されており、同論文の436ページの次の第25図に写真版「ポンベ病理学総論講義（1859～60）の筆記」がある。これは佐藤尚中筆写の第1分冊とみられる。この蘭文写真版の中に3箇所、即ち見出しに続く本文の2行目と4行目と12行目に *ontwikkeling* の筆写がみられる。現存するとすれば、16) と共に、1859年に導入された *ontwikkeling* の用法を示す資料として貴重である。石黒忠憲筆の『朋氏原病総論』は慶応義塾大学医学部北里記念医学図書館所蔵石黒文庫本に所蔵されている。ただし全文訳ではない。
尚、この部分の和訳には緒方富雄論文²¹⁾の第26図に「ポンベ病理学総論講義 松本良順訳（朋氏原病総論）の冒頭（石黒忠憲筆）」の写真版があり、1頁分の訳の対応を調べる事はできる。しかし、これにも長崎大学医学部ポンベ会館展示室の訳者未詳『朋氏原病総論』（時期未詳）の訳のように、この松本良順訳とはやや異なり、「自然生ノノ機其（具）悉く皆局部位置其形状ニ於ル其成形ニ於ケル物ノ多少所ノ接離ニ別ナク」に始まっている最初の箇所は次の様になっているものがある。「覆載ノ間々東西南北千形万状物ノ大小所ノ接離ニ別ナク皆ナ生々蕃育ノ機アリ存ス曾テ一体モ其所生ニ止ル者ナシ是ニ於テヤ育生（ヲルテン）アルモ飽ヘテ存在（セーフン）、アル事ナシ」。このように、1859年の導入過程に関しては蘭文のものと同種和訳の探究が必要である¹⁶⁾。
- 14) 「Pompe van Meerdervoort, J. L. C.」・佐藤尚中筆写：（朋氏内科書）。佐倉順天堂蔵。第3分冊目の後記に、1 *Deel* の終わりとして「28° January 1861. Pompe」とあり、又第6分冊目（地には「（朋氏内科書）五」となっているが誤りである）の後記には「Desima den 27° Séptember 1861」として、「De Oesicer van Gezandheid」、更に「Pompe van Meerdervoort」の署名がある。尚、本分冊のみ、順天堂書の和紙カバーがあり、裏には越後処士 長谷川（泰）太郎、土（居）借用」とある。国立歴史民俗博物館佐藤道夫家寄託本。
- 15) 「Pompe van Meerdervoort, J. L. C.」・佐藤尚中筆写：（朋氏外科書）。佐倉順天堂蔵。1861・文久元年。国立歴史民俗博物館佐藤道夫家寄託本。
- 16) この他に、内山孝一は『Handleiding tat de Natuurkunde van den gezonden Mensch. Nagazak. 1860.』と舜海佐藤先生譯・溪雲岩崎久道筆記『ポンベの人身窮理』を所蔵しており、ここには発生学が説かれており、後記には「Dejima den 1° December 1859.」と「Pompe」の署名があるとの事であるが、未見である。
尚、内山孝一：明治前日本生理学史。日本学士院編『明治前日本医学史 第2巻』。日本学術振興会。1955。250～253。を参照。本書の250ページの次の写真版「Pompeの人体生理学講本の一部」の上投の写真版の上半部にある見出しの次の第1行目中央部に *ontwikkeling* とみられる筆写がある。現存するとすれば、Pompe van Meerdervoort, J. L. C. が1959・安政6年の生理学の講義で最初に用いた *ontwikkeling* を知る上で欠かせないものとなる。
- 17) Pompe van Meerdervoort, J. L. C. : *Beknopte Handleiding tot de Geneesmiddeller. ten gebruike van de keizerlijke Japansche Geneeskundige school te Nagasaki. Desima. 1862.* 京都大学附属図書館特別資料室所蔵高橋家旧蔵本。18) ⑥は本書の和訳刊本である。
Pompe van Meerdervoort, J. L. C. は、13)～16)も出島での出版を考えたが、作業が遅い等の事で止めたとされる。佐藤尚中筆写にある鉛筆による補筆・訂正は出版を念頭においたためのものであろうか。

- 18) Pompe van Meerdervoort, J. L. C. の講義の和訳としては次のものを参考にした。各種写本の中には部分写本のものがある。

- ① 邦百漢埜逐爾の児高耳德講説・蘭疇松本源之茂筆記：甫謨百先生原病学・長崎大学附属図書館医学分館医学史料室，研医会図書館，慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館石黒文庫各所蔵本。写本には，原病学，原病総論と記されているものがある。
- ② 朋百先生口授・松本良順筆記：原病各論。長崎大学附属図書館医学分館医学史料室，研医会図書館，東洋文庫藤井文庫，慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館石黒文庫各所蔵本。写本には，病学各論，内科書，内科篇，内科論，内科学説などの表記のものがある。
- ③ 朋百先生口授・松本良順先生筆記：外科学説。京都大学医学部図書館坪井本，慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館富士川本，同石黒文庫本各所蔵本。写本には，外科論，外科学の表記もある。
- ④ 朋百先生口授・松本良順筆記：朋氏解剖説・慶応大学医学情報センター北里記念医学図書館石黒文庫所蔵本。但し，二(筋論)，三(動脈篇)，四(目耳篇)のみである。
- ⑤ 朋百(蘭)授・松本順記：朋百氏眼療則。京都大学医学部図書館富士川本，慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館石黒文庫(但し巻之二のみ)各所蔵本。写本には眼科論とされているものがある。

なお，ポンペは来日前に刊行された Sichel, J.: *Iconographie Ophthalmologique ou Description, avec Figures Coloriées, des Maladies de l'Organe de la Vue, comprenant l'Anatomie Pathologique, la Pathologie et la Therapeutique Medico-Chirurgicales*. Paris. 1856. を講義の参考にし，松本良順にサイン入りで贈った。現在，千葉大学附属図書館亥鼻分館東洋医学古書コレクションに所蔵されている。尚，11)の中西啓：長崎医学の百年。83ページを参照。

- ⑥ 凌海司馬先生譯澄：朋白氏業論。文苑閣。1869。京都大学医学部図書館富士川本，研医会図書館，東洋文庫藤井文庫各所蔵本。
他に朋百氏業性論，業性学，朋謨百業性各論もある。業論と業性論は別である。朋百氏講・松本良順述・司馬凌海註：朋氏業性学。1860・万延元年は。慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館石黒文庫所蔵本。

- ⑦ 朋百氏 棧里仁機。大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵中川朋甫旧蔵本。
- ⑧ 朋百・抱道英：内外経験良方。大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵中川朋甫旧蔵本。
- ⑨ 抱道英・朋百：養生館方叢。大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵中川朋甫旧蔵本。
- ⑩ 中西啓によると，この他にポンペの講義の和訳刊本として次のものがあるとされている。八木称平訳『散華小言』(1858・安政5年)，肥前藩士訳『鉞山学』(1858・安政5年)，司馬凌海訳・関寛斎補『七新薬』(1862・文久2年)，佐藤舜海(尚中)訳『眼科摘要』(1869・明治2年)，松本蘭疇編・大井ト新校補『梅毒治則』(1869・明治2年)。11)の中西啓：長崎医学の百年，89ページを参照。本稿執筆の時点で最初の二書は未見である。尚，慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館所蔵富士川本には，朋百般黙児埜里法爾篤鈔・倉次元意識・佐藤舜海関：眼科摘要。臨湖山房蔵。1866・慶応2年が所蔵されている。
- ⑪ 慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館石黒文庫本には石黒忠恵による Pompe van Meerdervoort, J.L.C. の講義の和訳写本が所蔵されている。石黒文庫本には「朋百氏七科四十四冊(現在二十八冊)」とあり，そこには化学五冊，理学五冊などもあがっているが現在同文庫には所蔵されていない。

- 19) 松本良順については下記を参照。

- ① 鈴木要吾：蘭学全盛時代と蘭疇の生涯。東京医事新誌局。1933。
- ② 村上一郎：蘭医佐藤泰然——その生涯とその一族門流——。房郷郷土研究会。1941。
- ③ 藤田宗一：ポンペと松本順。日本医事新報第1511号。1953。31～34。
- ④ 小川鼎三・酒井シツ校注：松本順自伝・長与専斎自伝。平凡社。1980。
- ⑤ 松本良順には，江戸へ帰ってから医学所頭取時代に，わが国最初の西洋衛生学書と称せられている，松本良順誌・山内豊城校閲補註：養生法。作楽戸蔵。1864。がある。京都大学医学部図書館所蔵富士川本。

- これには、飲食の個所で「人の百體發育して止まずこれを養ふものは皆血氣有る故なり」（13）として飲食の心得を述べ、小児に菓子類を与える事については、「殊に小児は追々生長し身體を造営發育すべき時なるをみたり甘きものを阿たふるは求めて壯健の天質を軟弱ならしめ生涯無用の人に陥らしむるべし」（17）と抑制を求めている。更に語解の所には「圈素^{セリユローセ}丸き泡の如く動いて流体の原始なり」（41）と記されている。液体病理学を学んだことがわかる。
- 20) 佐藤尚中については下記を参照。
- ① 本多元俊編：佐藤尚中先生。佐藤尚中先生誕生地保存会。千葉県小見川町。1936。
 - ② 小川鼎三：順天堂史。佐藤尚中伝1～4。順天堂医学第18巻。1972。112～115、286～291、407～414、518～523；順天堂史。佐藤尚中伝5～8。順天堂医学第19巻。1973。84～86、273～279、431～437、584～590。
 - ③ 篠丸頼彦：佐倉時代の尚中；中西啓：長崎時代の尚中先生；小川鼎三：佐藤尚中と大学東校；大滝紀雄：尚中の私生活；佐藤尚中先生略年譜。日本医史学雑誌第29巻3号——佐藤尚中歿後100年特集号——。1983。239～275。
- 21) 緒方富雄：日本病理学史。（日本学士院編：明治前日本医学史 第2巻）。日本学術振興会。1955。457～470。
- 22) Virchow, R.L.K.: Die Cellularpathologie in ihrer Begründung auf physiologische und pathologische Gewebelehre; zwanzig Vorlesungen gehalten während der Monate Februar, März und April 1858 im Pathologischen Institute zu Berlin. Berlin. 1858. 野間科学医学研究資料館所蔵本。
- 23) 田中昌人：日本における発達の概念の導入について——Perry, M.C.; Harris, T.; Alcock, R.の場合——。京都大学教育学部紀要第37号。1991。46～75。
- 24) Bauduin, A. F. については次を参照。
- ① 小川劍三郎：抱桃英（ボードイン Bauduin）先生傳。実験眼科雑誌第3年次（13～19）合冊号。1919。363～378。
 - ② 中西啓・長崎医学の百年。長崎大学医学部編『長崎医学百年史』。1961。73～141。
 - ③ 中泉行正：明治前眼科史。日本学士院編：明治前日本医学史第4巻。日本学術振興会。1964。211～433。Bauduin, A. F. については、399～403。を参照。
 - ④ 大阪大学医学伝習百年記念編：大阪大学医学伝習百年史年表。大阪大学医学部学友会。1970。
 - ⑤ 荒瀬進：東京大学東校オランダ医官 A. F. ボードインの日講記聞に就いて。蘭学資料研究会「研究報告」第271号。1973。（「復刻版」第21巻。1986。203～205。）
 - ⑥ 石田純郎：お雇いオランダ人医師——總論 ボードイン人脈——。日本医史学雑誌第28巻。1982。328～337。; A. F. ボードインの生年月日についての考察。日本医史学雑誌第28巻。1982。391～394。; 新政府の犠牲となったボードイン。KLM オランダ航空ウィンドミル編集部編『日蘭交流の歴史を歩く』。NTT 出版。1994。114～117。
- 25) Bauduin, A. F. が外国語の成書を蘭訳して学生に講義をしたものとしては、次のものが明らかになっている。
- ① 雲泥留理屈著・抱導英参訂口授・篠原俊庵通辨：内科口授。大阪大学附属図書館適塾文庫中川朋甫旧蔵本。本書には講義日付あり。
 - ② Bauduin, A. F.: Zakboek der Operative Chirurgie, bewerkt door Dr. J. A. Isnard, & Dr. H. Prosch. 大阪大学附属図書館適塾文庫本。
- 26) Bauduin, A. F. の講義を和訳した写本と刊本としては、次の諸資料を用いた。
- ① 抱氏人身究理書。研医会図書館所蔵本。長崎大学医学部ポンベ会館展示本。長崎大学経済学部図書館所蔵本は韋徳英先生口授：人身究理。武藤所蔵となっている。
 - ② 蘭抱導英口授：人身窮理——抱氏人身理学——。時期未詳。東洋文庫所蔵藤井文庫本。
 - ③ 著者未詳：人身窮理聴講記。時期未詳。京都大学附属図書館所蔵本。
 - ④ 抱氏内科新論。時期未詳。武田科学振興財団杏雨書屋所蔵本。
 - ⑤ 抱桃英口述筆記：崎山病院抱氏口授内科各論——原病各論——。時期未詳。京都大学附属図書館所蔵本。

- ⑥ 鵬氏眼科書. 時期未詳. 東京大学図書館土生家旧蔵古医籍, 千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵本。この他に長崎大学医学部ボンベ会館には『勃兌英(印)眼科新論』が展示されている。
- ⑦ 抱桃英講読: 外科通論. 時期未詳. 大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵京都産院文庫本。
- ⑧ 幕洞院口授筆記: 外科各論. 1866・慶応2年. 卷によっては鵬度英先生口授筆記となっており, 戸塚法眼先生再訂とある. 大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵本。
- ⑨ 抱道英氏精得館病室方叢. 1865. 慶応元年. 大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵中川朋甫旧蔵本。
- ⑩ 抱道英口授: 脚気新説, 精得館記聞, 断乳論, 新薬効能. 1866・慶応2年. 大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵中川朋甫旧蔵本。
- ⑪ 抱桃英傳習館方府. 1868. 明治元年. 大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵本。
- ⑫ 蘭醫抱獨英氏口授・緒方郁蔵訳: 官版日講記聞. 大阪医学校. 1869・明治2年. 大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵本。
- ⑬ 嗜嗚嘍啖・緒方蕃蕃輯: 袖珍方叢. 適々斎蔵. 1869・明治2年. 大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵本。
- ⑭ 和蘭醫官抱獨英氏口授: 日講記聞. 大学東校官版. 1870・明治3年. 京都大学附属図書館所蔵本。
- ⑮ 嗜嗚英氏口授: 嗜氏生理記聞. 合書堂蔵. 1874・明治7年. 本書は, 婦口直前の1870・明治3年秋に2か月間, 大学東校で行った講義録の刊本である。
- この他に, 中西啓: ボードウインの生理学講義. 長崎県医師会報第323号. 1973. 81. によると, 石井宗直のノートに『嗜先生口述筆記』があり, 1864・元治元年からの講義年月日が記されているとの事であるが, 未見である。
- 又, 慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館所蔵の富士川本には, 原田帷頭受業: 抱氏・蔓氏病理新論があり, 卷之上には抱道英による脚気や各種急性伝染病が, 卷之下には蔓斯歇兒篤による水腫や喉頭気管枝の各種疾患がのべられている。
- 27) A. ボードヴァン記・フォス美弥子訳: オランダ領事の幕末維新——長崎出島からの手紙——. 新人物往来社. 1987.
- 28) Mansvelt, C. G. van に就いては次を参照。
- ① 重久篤太郎: 京阪を中心とした明治文化と西洋人. 同志社高商論叢第15号. 1937. 93~115. Mansvelt, C. G. van については107~108.
- ② 中西啓: 長崎医学の百年. 長崎大学医学部編『長崎医学百年史』. 1961. 142~207.
- ③ 大滝紀雄: 長崎におけるボンベ前後のオランダ医学(下). 日本医事新報第2328号. 1968. 47~49.
- ④ 石山洋: セー・ゲー・ファン・マンスフェルト——明治科学の恩人達 20. 科学技術文献サービス第42号. 1975. 27~29.
- ⑤ 大鳥蘭三郎: C. G. マンスフェルト伝補遺. 日本医史学雑誌第25巻第3号. 1979. 87~89.
- 29) 満私歇兒口授・藻奇中蔵筆稿: 内科新説. 時期未詳. 東洋文庫所蔵藤井文庫本。
- 30) 佐藤尚中の重訳書としては次を用いた。
- ① 佐藤舜海重譯: 施利烏斯瘍学生全書. 1859・安政6年. 京都大学医学部図書館所蔵富士川本。
- ② 烏雲姪兒利伊著・佐藤舜海重訳. 雲姪兒理勞療略血篇. 1861・文久元年. 東洋文庫所蔵藤井文庫本。
- ③ 佐藤尚中(舜海)訳: 斯篤魯黙兒砲瘻論. 済衆精舎蔵校. 1865・慶応元年. 千葉県立佐倉高等学校図書館鹿山文庫所蔵本。
- ④ 舜海佐藤尚中譯述: 外科醫法. 済衆精舎. 1865・慶応元年. 千葉大学附属図書館亥鼻分館東洋医学古書コレクション所蔵本。
- ⑤ 佐藤尚中: 医制改革建白書. 1866・慶応2年. 国立歴史民俗博物館所蔵佐藤道夫家寄託本。
- ⑥ 佐藤尚中: 済衆録・英蘭堂. 1869・明治2年. 国会図書館所蔵本。
- 尚, 順天堂大学医史学研究室には, 佐藤尚中訳の『斯篤魯黙兒砲瘻論』, 『外科醫法』, 『済衆

録』の自筆稿本が訳出の日付入りで所蔵されているとの事であるが、未見である。

- 31) 新宮涼民・涼閣共訳：内科則，続内科則。1872・明治5年。京都大学附属図書館特別資料室所蔵富士川本。
- 32) 坪井信良については次を参照。
- ① 著者不明：故坪井為春先生傳。中外医事新報第151号。1886。42～44。；同續第152号。1886。43～45。
 - ② 竹内真一：坪井信良と福井——佐渡家文書を中心として。日本医史学雑誌第22巻第2号。1976。16～17。
 - ③ 宮地正人編：幕末維新風雲通信——蘭医坪井信良家兄宛書翰集——。東京大学出版会。1978。
 - ④ 今井一良：金沢市立図書館「蒼龍館文庫」と坪井信良。石川郷土史学会会報第15号。1982。1～11。
- 33) 坪井信良譯：侃斯達篤内科書。老自館。1864・元治元年～1865・慶応元年。京都大学医学部図書館所蔵富士川本。
- その他、坪井信良には、ス布飲傑爾（Sprenghel, W.）著・坪井信良訳：醫則。時期未詳もある。慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館所蔵富士川本。ここには第43に「生力……発生」、第69に「伝染毒ノ発生ヲ防止スヘシ」などの訳がある。原典は未見であるので、本稿では Canstatt, C. のものだけを取り上げた。
- 34) Dusseau, J. L. & Henoeh, E. H. : C. Canstatt's Bijzondere Ziekte—en Genezingsleer, uit een Klinisch Standpunt Bewerkt. Amsterdam.1857. 福井県立大野高等学校図書館大野藩等旧蔵図書および京都大学附属図書館特別資料室所蔵新宮家旧蔵本（新宮家旧蔵本はⅡを欠く）。
- 35) 前記書第1分冊目の第3編第5部の「Geneesmiddeldyskrasiën」には「B. Ontwikkeliingsziekten」の章がある。最初の段落だけでも次のような合成語がふくまれている。
- 「De overgang van het vruchtelijk tot het uitwendig atmospherische leven, van het zuigen aan de moederborst tot het gebruik van ander voedsel, de tandwording, de ontwikkeling der huwbaarheid, de maandstonden, het tijdperk, waarin de menstruatie ophoudt(klimakterische jaren), het kraambed, — al deze toestanden en overgangen begrijpt men gewoonlijk onder den naam van *ontwikkeliingsprocessen, ontwikkelingsperioden*. Doordien er gedurende dezelve eene opmerkelijke verandering in de verdeeling en afwisseling der organische levensuitingen plaats heeft, doordien enkele deelen of stelsels de zetel eener voorheerschenden buitengewone krachtsontwikkeling of van eene belangrijke stoffelijke verandering (wasdom) worden, is de prikkelbaarheid van het afzonderlijke deel of van meerdere organen, of van het gansche organisme in een verhoogden en derhalve ook ligter kwetsbaren toestand geplaatst — met andere woorden, deze ontwikkelingstijdperken brengen in het algemeen een verhoogden *aanley tot ziek worden* mede, die zich daarenboven het duidelijkst in die deelen uitdrukt, die onmiddellijk aan het ontwikkelingsproces deelnemen. Wordt een persoon juist ten tijde van een ontwikkelingsstoestand, door eene acute, epidemische ziekte aangetast, dan □ xmt de gevaarlijkheid der laatste door den toestand van verhoogde prikkeling, waarin zich het organisme bovendien bevindt, vaak aanmerkelijk toe. Daarom zijn b. v. heerschende ziekten voor zwangeren en kraamvrouwen dikwijls zoo noodlottig. Men begrijpt nu welk een aandeel physiologische ontwikkelingsprocesseff aan het ontstaan van ziekten hebben, — namenlijk slechts dat van eene *causa praedisponens*. Dat het ontwikkelingsproces zelf door de ziekte gestoord, anomaal kan gemaakt worden, spreekt van zelf. *Ontwikkeliingsziekten* zijn derhalve de zoodanige, die in zoo verre uit, het eene of andere ontwikkelingsproces voortkomen, als het organisme of het orgaan door dit laatste in eenen toestand van verhoogde voorbeschiktheid gebragt wordt.」(I-742～743)。
- 36) 第2分冊は、福井県立大野高等学校図書館所蔵大野藩等旧蔵本を参照。
- 第2分冊は、「Bijzondere Locaal-Pathologie」を取り扱っている。79～81ページは「I Ziekten van het Hoofd」の一部である。その他、「II Ziekten van het Ruggemerg」の一部「Spina bifida」

(174~179)も参照。

- 37) Hageman, H. H. : De Bijzondere Ziekte-en Genezinger, uit een Klinisch Standpunt Bewerkt, door Dr C. Canstatt. Utrecht. 1848. 大阪大学事務局適塾記念会蔵本。
 本書の「Inleiding」(1~12)の中では「Als aanhangsel zou men hier als ook door eigenaardige, steeds dezelfde blijvende, oorzaken verwekte ziekelijke toestanden kunnen rangschikken:」として、a) Vergiftzicken, b) Verwondingen, c) Ontwikkelingszicken, d) Ook de epien entozoa があがっており、次の説明が行われている。
 「C) Ontwikkelingszicken (zicken, welke door zekere ontwikkelingstoestanden der bewerktuiging verwekt of gewijzigd worden, zoo als door het tandenkrijgen, den stondenlood, het kraambedenz.). Aangeborene gebreken van de vorming.」(10)
 この後の本文中には、ontwikkelingstrappen という合成語があり、或いは individualiteitszicken といった語もある。
- 38) 島村鼎甫に就いては次を参照。
 ① 松尾耕三：近世名医伝——附録來舶洋医略伝——卷之三。香草園藏版。1886。慶応義塾大学医学情報センター北里記念医学図書館富士川本。
 ② 紫竹屏山：本朝医人伝。青木嵩山堂。1910。237~238。
 ③ 東京帝国大学編：東京帝国大学五十年史一上一。東京帝国大学。1932。354~391。
 ④ 内山孝一：明治前日本生理大学史。日本学士院編『明治前日本医学史 第2巻』日本学術振興会。1955。247~250。
- 39) 島村鼎甫譯述：生理發蒙。五松樓。1866。京都大学附属図書館、大阪大学附属図書館適塾文庫所蔵本。
- 40) Lubach, D. : Eerste grondbeginselen der natuurkunde van den Mensch. Gouda. 1855. 千葉県立佐倉高等学校図書室所蔵鹿山文庫本。
 本原典に関して、内山孝一は Liback とのみ述べており、他の研究者によっても明らかにされていない。
- 41) 神田孝平に就いては下記を参照した。
 ① 神田乃武編：神田孝平略伝。1910。
 ② 大久保利謙編：明治啓蒙思想集。明治文学全集 3。筑摩書房。1967。199~242。
 ③ 本庄栄治郎編：先学遺文。清文堂。1971。
 ④ 本庄栄治郎編：神田孝平——研究と史料——清文堂。1973。
 ⑤ 有坂隆道：オランダ三話——大阪城絵図・小森桃塙「解剖図」・神田孝平『経済小學』——。有坂隆道編『日本洋学史の研究 IV』。創元社。1977。219~246。
 ⑥ 田崎哲郎：神田孝平の数学観をめぐって。有坂隆道編『日本洋学史の研究 V』。創元社。1979。191~204。
 ⑦ 小松醇郎：幕末・明治初期数学者群像——(上)幕末編——。吉岡書店。1990。89~117。
- 42) 神田孝平重譯：経済小學。神田氏藏版。1867。京都大学附属図書館所蔵本。
 本書は、翌年同じ内容で『西洋経済小學』として重版され、更にその後、もとの『経済小學』として、同じ内容で版を重ねた。41)④の85~143ページに収録されている。
- 43) Ellis, W. : Outline of social economy. London. 1850。
 初版は1846年に刊行された。Graafland, H. H. が蘭訳したものはその第2版である。滞英中の田中耕二郎氏の好意で London の British Library よりマイクロフィルムを入手した。
 なお、『経済小學』の蘭訳に関してこれ迄述べられていた事に関しては、41)④の20ページを参照。本稿では蘭訳本を明らかにする事ができたと考える。
- 44) Graafland, H. H. : Grondtrekken der Staatshuishoudkunde, door W. Ellis. Utrecht. 1857。
 蘭訳本の初版は1852年に刊行されているが、神田孝平が重訳したのはその第2版である。本文の内容はどちらも同じである。蘭訳本の初版と第2版は、京都大学附属図書館相互利用掛を通じてオランダの Leiden にある Universiteitsbibliotheek と Utrecht にある University Library から借用した。

- 45) 田中昌人：わが国におけるカリキュラム改革と発達研究の出発——西周における「理ノ辞ノ説」の検討をもとに——。京都大学教育学部Bコース共同研究報告論集Ⅱ。1990。14～27。
- 46) Hepburn, J. C. の『和英語林集成』（1867）の初版本では、「†HATSZ-DATZ」という具合に見出しに†の印（「stand for word used only in books or obsolete」）が付記されていた。
 田中昌人：文明開化期における発達の概念の導入について——Hepburn, J. C. と中村正直の場合——京都大学教育学部紀要紀要第34号。1988。93～126。を参照。
 ① Hepburn, J. C. 『和英語林集成』（1867・初版）については前記論文99ページ参照。
 ② 中村正直『自由之理』（1871～1872）については前記論文107～112ページ参照。
- 47) 田中昌人：わが国における発達の概念の生成について（1）——江戸時代における成人男子にたいする「発達」の概念の使用と子育てにみられる成長概念の成立——。人間発達研究所紀要第2号。1988。2～30。
- 48) 神田孝平の他の著書は京都府立総合資料館所蔵本を用いた。その内、神田孝平譯述：和蘭王兵學校校掟書。九潛館藏版。1862。はオランダでは1857年に撰定されたものであるが、その「第2綱」第24条の5番目には「將官學士等は平生諸生徒に對し其才能を伸し諸事鮮し安々覺安き様にいたし且學力徳望を以て廣くは人間の大道別しては武士の作法何れか功名何れか耻辱たることを合点いたさすべき事」（13）とある。従って、少くともこの頃からオランダでは、学制に於いても、兵学校にあってもその教育は、児童や生徒の「才能を伸す」ことに目的が置かれていた事がわかる。
- 49) 内田正雄譯：和蘭學制。1869・明治2年。開成學校。10。東京經濟大学図書館所蔵本。
 なお、吉野作造編代表：明治文化全集 第8巻。日本評論社。1967。海後宗臣解題2～5。を参照。『和蘭學制』は第18巻本文1～18に所収。
- 50) Staatsblad van 1857. No. 103. (Wet op het Lager Onderwijs vastgesteld den 13den Augustus. 1857) Staatsbladen van het koninkrijk der Nederlanden. 1857. 72～75. 東京大学総合図書館所蔵本。
- 51) 内田正雄に就いては下記を参照。
 ① 宮永孝：幕末オランダ留學生の研究。日本經濟評論社。1990。651～659。
- 52) 内田正雄纂輯：輿地誌略。1870～1877。最後の巻11, 12は、内田正雄の没後、西村茂樹が執筆した。京都大学附属図書館所蔵本。
- 53) 明六雑誌は、京都大学文学部図書館史学科閲覧室所蔵本を用いた。津田真道「新聞紙論」（1873）は第20号、「人材論」（1874）は第30号、西周「知説 五」（1873）は第25号にある。これらの内容の検討は別稿で行う。
- 54) 宮地正人：幕末維新風雲通信——蘭医坪井信良家宛書翰集——。東京大学出版会。1978。330～333。
- 55) この他に、当時の蘭学者の書翰や日録は更に調査中である。これ迄に次のものを調査したが、1860年代においてはそこに発達の語の使用を見出すことはできなかった。
 ① 緒方富雄・適塾記念会編：緒方洪庵のてがみ。その1。1980。；その2。1980。；その3。1994。いずれも菜根出版。その3の編者には梅溪昇が加わっている。
 ② 永野正信記：青窓紀聞。名古屋市蓬左文庫所蔵本。ここには、1860年代ではないが、1839・天保10年3月に、12代藩主の相続に就いて藩論が二分した折に、「八十八歳主旦翁述之」の文書が納められており、そこでは発達の語が次のように用いられている。
 「一卿相大夫妻老下ノ人情ヲ上ニ達テ上ノ實心ヲ下ニ及ボシ上ヲ正シ下ヲ導ク是ソノ任之若其任ヲ失スル時ハ上下隔絶シテ國危ク身死セン恐ベシ懼ルベシ余按スルニ雨ハ天ヨリ降ルモノニ非ス地氣ノ発達シテ後雲起リ雲起テ後雨降ル是ニヨツテ万物生ニス若天地相和セズ地氣ノ発達ヲ天受納ナクシテ一年モ二年モ雨露ヲ施サスハ万物ノ爛焦必然ナラン」
- 56) 河野剛禎造識：農業花暦。黒金舎藏梓。備中倉敷小塩舎。1870・明治3年。国会図書館所蔵本。
- 57) 備後喜六：勸業修養粗話。1870・明治3年。国会図書館所蔵本。
- 58) 横浜毎日新聞創刊号（明治3年12月8日）。横浜活版社。1870。横浜開港資料館所蔵複製資料。
- 59) 幕末明治の新聞発行に就いては次を参考にした。

- ① 小野秀雄：日本新聞発達史. 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社. 1922.
 - ② 明治文化研究会編：明治文化全集 第4巻 新聞篇. 日本評論新社. 1955改版.
 - ③ 西田長寿：明治時代の新聞と雑誌. 至文堂. 1966.
 - ④ 東京大学明治新聞雑誌文庫編：「明治を読む」——明治の新聞雑誌展——東京大学明治新聞雑誌文庫. 1977.
- 60) 横濱毎日新聞以外の幕末明治の新聞の内容は次によった。
- ① 木村毅編：幕末明治新聞全集 第1巻. 世界文庫. 1961.
 - ② 木村毅編：幕末明治新聞全集 第2巻. 世界文庫. 1961.
 - ③ 木村毅編：幕末明治新聞全集 第3巻. 世界文庫. 1961.
 - ④ 木村毅編：幕末明治新聞全集 第4巻. 世界文庫. 1961.
 - ⑤ 木村毅編：幕末明治新聞全集 第5巻. 世界文庫. 1961.
- 61) この期に柳河春三によって、わが国最初の雑誌である『西洋雑誌』が刊行され、1867・慶応3年10月から1869・明治2年9月までに6冊が刊行されている。ここには「発達」の語が用いられているのを見出すことはできなかった。

<以上>